
異界の防人

ミニプリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の防人

【Nコード】

N31230

【作者名】

ミニプリ

【あらすじ】

ストライクウィッチーズ2の二次創作です。かなり趣味全開です。GLありますので苦手な人は絶対に見ないで下さい。

あらすじ

三原山に身を投じたゴジラの生存が確認され、ゴジラ細胞を組み込まれた異形の植物「ビオランテ」が芦ノ湖に現れた頃、1隻の大型自走式浮きドック「極光」が突然発生した異常な電磁障害に巻き込まれて姿を消してしまう。

そして、電磁障害を潜り抜けた「極光」と乗組員達が目にしたのは

謎の敵「ネウロイ」の驚異に晒される異世界の姿であった。

消失

日本市ヶ谷防衛省特殊戦略作戦室

防衛省に設けられている特殊戦略作戦室では、室長の黒木特佐が洗面を作りながらデスクに並べられた報告書を見詰めていた。

「やはり、「極光」は見つからないのか…」

黒木の呟きを受けた部下は、重苦しい表情を浮かべながら頷くと、モニターに歩み寄り、写し出されている日本近海の海図の一点を指し示しながら口を開く。

「本日1100発生した異常な電磁障害以降、発生海域で特殊任務を実施していた大型自走式浮きドック「極光」の姿は現在に至るまでも確認されていません。対G第2種警戒態勢が発動されている現況からこれ以上の搜索活動拡大は不可能であると思われます。」

黒木は部下の言葉に頷くと、報告書を手にとると何枚かをめくり、行方不明となった「極光」に関する文面を見詰めながら呟いた。

「厄介な事だな、Gの動きが予断を許さない状況で「極光」が行方不明になるとはな…試作機しか搭載されていなかったのが不幸中の幸いだな。」

黒木の呟きを受けた部下は同意するように小さく頷くと、肩を竦めながら言葉を返した。

「仰る通りですが大打撃ですよ、試作機とは言えどもアイツは遠隔操縦出来ない点を除けば配備機体と大差無い性能を持っていますからね。」

「機体の喪失も痛いがそれよりも痛いのは、ヒトだ…この状況下では優秀な指揮官は一人でも多く欲しいからな…」

黒木はそう言うと言行方不明となった「極光」関係者のリストのトップに記されている指揮官の名前を指し示し、部下も同意するように頷いた。

一等陸尉
ちようそかべもとひさ
長曾我部基久

二人の見詰める先には「極光」に乗り込んだ150名の関係者達を束ねる指揮官の名前が記入されていた。

その後特殊自走式浮きドック「極光」は原因不明の電磁障害による、排水システムのトラブルによって沈没したと発表され、乗り込んでいた関係者は全員が死亡したと発表された。この事故に対してマスコミは悲惨な海難事故として報じたが、直後に芦ノ湖に巨大植物が出現した為、あまり大きなニュースとなる事は無かった。

異変（前書き）

本作品開始の時期はストライク・ウィッチーズ2本編第4話と第5話の間となります。

異変

アドリア海上空「ストライク・ウィッチーズ」基地周辺空域

初夏の陽射しを浴びた海面が眩い煌めきを放ち、軽やかに舞う薫風は、あくまでも心地好く、そして爽やかであった。

爽やかな初夏の陽射しのが輝く蒼空そらは吸い込まれるようなスカイブルーに染まり、見る者を開放的な気分へと誘っている。

初夏の晴れ渡った蒼空の下、新たに出現した新型ネウロイからロマーニャを護る為に再編成された第501統合戦闘航空団「ストライク・ウィッチーズ」指揮官のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が戦術機動訓練を実施していた。

スラリと伸びる両足に装着されたストライカー・ユニットBf-109K-4に搭載されたDB605D魔導エンジンが軽やかに唸り、魔導プロペラが発生させた推力がダーク・グリーンの軍服と赤紫のズボン（ズボンです、誰がなんと言おうがズボンです）に包まれた肢体を押し、スカイブルーの蒼空に鮮やかなコントレール（飛行機雲）を描いていく。

スカイブルーの蒼空に軌跡を描くその動きは優雅とさえ言える程巧みであり、彼女の異名である女侯爵フェルステインの如き気品に満ちていた。

一通りの戦術機動を終えたミーナは、空中に佇むと小さく伸びをしながら澄み切った蒼空を見渡した。

初夏の陽射しを浴びた茜色のストレートロングの髪が鮮やかに輝き、髪と同じ色の柔和な瞳が静かに煌めいている。

ミーナはストライカーユニット装着の証である灰色狼の耳と尾を靡かせながら蒼空を見渡しつつ感慨深げな眩きをもらした。

「久しぶりね、こうして飛ぶのも…」

ミーナがそう呟くとそれに答えるようにミーナの耳に埋め込まれたインカムから、地上の管制搭にいる「ストライク・ウィッチーズ」

戦闘隊長の坂本美緒の笑い混じりの言葉が届けられる。

「どうだ、ミーナ、久しぶりの空を漫喫しているか？」

美緒の言葉を受けたミーナは、軽く微笑を浮かべながら口を開いた。
「いいわね：最近は地上雑務に追われていてまともに空を飛んで無かったから：この感覚、久しぶりよ。」

ミーナの返答を受けた管制塔からは美緒が笑い声と共に新たな言葉を投げかけて来た。

「戦術機動訓練が終わったら模擬戦に入る。バルクホルンが発進する予定だ。」

「まあ、中々骨が折れそうね：」

ミーナがそう言った刹那、唐突にそれは発生した。

無線機に突然激しいノイズが発生し、ミーナは顔をしかめさせながらインカムを耳から離すと、そこから漏れ聞こえる音に耳を傾けた。激しいノイズは暫くの間インカムから流れていたが、始まった時と同じように唐突に終わりを告げ、代わりに美緒の呼び声がミーナの耳へと到達する。

「おい、ミーナ、どうした？大丈夫か？ミーナ！」

美緒の声を耳にしたミーナはインカムを耳へと戻すと、落ち着いた口調で管制塔に言葉を返す。

「私は大丈夫よ。物凄い電波障害だったわね。基地の方は大丈夫なの？」

「ああ、今の所特に問題は：いや、ちよつと待て：」

それから暫く間を置いた後、再びもたらされた美緒の声には緊迫の色が色濃く現れていた。

「基地の南南西約25海里的海域に大型船の反応が突如出現した。電波障害の前には何の反応も存在していなかった事から考えると、先程の電波障害と何らかの関係があると考えるのが自然だな。」
美緒の言葉を受けたミーナは一瞬だけ思案顔になったが、次の瞬間には凜とした表情を浮かべながら口を開いた。

「美緒、バルクホルンに私の武器を持って発進させて、それからウ

イチを2名、緊急発進させて頂戴。私を含めた4人で偵察活動を実施するわ」

「了解した、エイラとサーニャを発進させる。気をつけるよミーナ…」

「了解、大丈夫よ、無理はしないわ…」

ミーナは美緒との交信を終えると大型船が確認された方角に視線を向け、静かに空中に佇んでいた。

緊急発進（前書き）

現時点での本編からの変更点

トゥルーデさんの武装をMG―42×2からMG―151／20×2に変更しています。

サーニャさんの本編ストライカー・ユニットはMiG―225ですが使用魔導エンジンが不明の為、無印で使用していたMiG―60をそのまま使用しています。

緊急発進

「ストライク・ウィッチーズ」基地・格納庫兼発進施設

ミーナの指示を受けた美緒の命令を受け慌ただしく動き始めた格納庫の中、ストライカー・ユニットが置かれたユニット装着装置に向けて駆け寄る一人の美少女の姿があった。

ツインテールに纏め上げられたダーク・ブラウンの長髪と、力強い光が宿る琥珀色の瞳が特徴的な整った面立ちは、不撓不屈を具現化したような力強さに溢れ、彼女の美貌を更に引き立てるアクセントとなっている。

ライトグレーの軍服と薄い水色のズボン（くどいようですがズボンです、ズボンと言う設定なんですからしょうがありません）に包まれた肢体が疾風^{かぜ}のようにユニット装着装置の所に駆け寄る。

バルクホルンは装着装置のラッタルを一気を駆け上がると、愛用のストライカーユニット、FW-109D-9に両足を差し込んだ。

刹那、バルクホルンの肢体が淡い光に包みこまれ、ダーク・ブラウンの髪をかき分けてジャーマン・ポインターの柔らかな耳が現出し、臀部からは尾が具現化する。

バルクホルンの魔力を受けたJuma-213魔導エンジンがそれに呼応して高らかな唸り声をあげ、現出した魔導プロペラが回転数を上げて行く。

発進態勢を整えたバルクホルンが自分の武装である2丁のマウザーMG-151/20、20ミリ機銃を手に取り、続いてミーナのMG-42、7・92ミリ機銃に手をかけた時、新たに2人の美少女が格納庫に駆け込んで来た。

アイボリー・クリームのロングヘアとアメジストの瞳が特徴的な美貌を持ち、どこか捕らえ所の無い雰囲気にもまれた美少女、エイラ・イルマタル・ユートイライネン中尉と、サラサラと流れる銀系のセ

ミロングに淡いエメラルド・グリーンの瞳が印象深い目鼻立ちの妖精のように儚げな印象の美少女、サーニャ・V・リトヴァク中尉の2名は瞳に鮮烈な光を宿しながら格納庫に駆け込むと、自分達のユニット装着装置に駆け寄る。

ライトブルーの軍服と白いストッキングと言う装いのエイラの肢体が軽やかに舞い、白いストッキングに覆われた両足がストライカー・ユニットBf-109K-4に差し込まれると、エイラの肢体が淡い光に包み込まれると同時に黒狐の耳と尾が具現化され、エイラの魔力を受けたDB-605D魔導エンジンが咆哮をあげる。

エイラが出撃準備を整える傍らでは黒を基調とした服に身を包み、細くしなやかな両足を黒のストッキングで覆ったサーニャが愛用ストライカー・ユニットMig-60を装着し、搭載魔導エンジンAM-35Aの轟音を響かせつつ黒猫の耳と尾を靡かせていた。

ストライカー・ユニットを装着したエイラとサーニャは続いて武器に手を伸ばし、エイラがMG-42を、サーニャが9連装式ロケットランチャー、フリーガーhammerを抱え上げる。

「エイラ、サーニャ、準備はいいな」

「ああ、いいぞ」

「準備完了です。」

二人の準備が完了したと見たバルクホルンが確認の為に声をかけると、エイラとサーニャが相次いで答えを返し、それを受けたバルクホルンは小さく頷きながら力強い口調で命令を下す。

「発進！」

バルクホルンが命令を発すると同時に三人の足下が眩い光に包まれると同時に光輝く魔方陣が現出し、魔導エンジンが一際高い咆哮をあげ、魔導プロペラが回転数を一気に上昇させる。

それと同時にバルクホルン達の肢体が、弾かれたように前進を始め、格納庫を飛び出して行く。

格納庫を飛び出したバルクホルン達が更に魔導エンジンの出力を上昇させると、彼女達の速度が更に上昇し発生した揚力を受けた身体

がフワリッと浮き上がる。

空に浮き上がったバルクホルン達は速度を増しながら上昇を続け、スカイブルーの蒼空に三条のコントロールが鮮やかな軌跡を描いて行く。

軽やかに蒼空を駆け登ったバルクホルン達がミーナの所に到着すると、ミーナは鋭い表情を幾分か和らげながら、バルクホルン達を出迎える。

「ご苦労様、トゥルーデ…」

「問題無い」

バルクホルンはそう応じながらミーナにMG-42を差し出し、ミーナは頷きながらそれを受け取ると、全員を見渡しながら口を開いた。

「これより我々は、基地の南南西25海里の海域に突如出現した大型船への偵察を実施します。」

ミーナはバルクホルン達が頷いたのを確認すると自分も大きく頷きながら、命令を下す。

「発進！」

「「了解!!」」

ミーナの命令を受けたバルクホルン達は即座に返答を返し、それを合図として4人はミーナを先頭にしながら、正体不明の大型船が発見された方向に向けて前進を開始した。

漂流者達（前書き）

ユニークアクセス500突破（（（^^^；）））これからも宜しく願
いします（（（^| ^；）））

漂流者達

アドリア海特殊自走式浮きドック「極光」

防衛省が保有する特殊自走式浮きドック「極光」は訓練中に生じた電磁異状からの復旧作業を行いつつ、10ノット前後のゆっくりとした速度で周回を続け、電磁異状発生前から大きく急変した現状の把握に努めていた。

「極光」の指揮官を勤める長曾我部基久一等陸尉は復旧作業が一段落した事を確認すると、部下の羽島猛三等陸尉を伴いつつ、ブリッジ後方に設置されたヘリポートに移動して、穏やかなスカイブルーの空を見上げていた。

「一体どこなんでしょうねえ…ここ」

羽島が上空を見上げながら呟くと長曾我部は同じように空を見上げつつ、小さく肩を竦めながら言葉を返した。

「ラジオは入るがGPSや衛星通信はお釈迦、おまけにラジオから聞こえて来るのは、ロマーニャやオラシヤといった聞いた事の無い地名…まあ、生きてるんだから良しとするしかないな…」

しごくのんびりとした様子で言葉を返した長曾我部に対して、羽島は苦笑と共に頷きながら言葉を返す。

「特戦群（とくせんぐん＝特殊作戦群）から権藤一佐に引っこ抜かれて、アイツのおもりをするようになったと思ったらGの動きが怪しくなった挙げ句にこの状況…踏んだり蹴ったりですね。」

「全くだ。そして現在一番の懸念材料は…」

長曾我部がそう言いながらある方向に視線を剥けると、羽島は表情を鋭くさせながら口を開く。

「識別不明の航空物体、反応から見る限り、かなりの小型でしかもホバリング中、何者でしょうか？」

「常識的に考えれば、小型のヘリコプターだが…」

長曽我部がそこまで言った時、無線機にブリッジの佐伯夕風三等陸尉からの警報が入る。

「長曽我部一尉！レーダーに新たな反応です。ホバリング中の飛行物体に新たに三機の飛行物体が接近中、反応強度からして同一機体と思われます。速度約600！更に加速中です！」

「速すぎる…」

夕風の言葉を受けた羽島が驚きと戸惑いの入り雑じった声をあげ、長曽我部が同意するように頷いた。陸上自衛隊の保有する最強の戦闘攻撃ヘリコプターAH-64D「ロングボウ・アパッチ」でさえ、最高速度は時速300キロに満たない事を考えると接近してくる飛行物体の速度は驚くべき物があった。

一方の長曽我部は夕風の言葉に対して、表情を引き締めながら口を開き指示を送る。

「佐伯、シースパローの射撃管制レーダーとゴールキーパーの状況はどうなっている？」

長曽我部の声に対して夕風は即座に返答を返す。

「シースパローは現在修理中、ゴールキーパーはいけます。」

「ゴールキーパーは射撃態勢を整えつつ待機、こちらが命令しない限り、迎撃は行うな」

「了解」

長曽我部は、ブリッジとの更新を終えると同時に傍らの羽島に向けて声をかける。

「羽島、携SAMを！！」

「承知！」

長曽我部の言葉を受けた羽島が叩きつけるように応じつつブリッジに駆け込み、ブリッジ周辺に配置された4基の30ミリCIWS「ゴールキーパー」が微かな駆動音と共に射撃待機モードに入る。

「ゴールキーパー待機モード入りました。」

「了解。」

夕風の言葉を受けた長曽我部が短く応答していると羽島が部下の甲うがけんばち

賀源八陸曹長と御子柴源之丞^{みこしばげんのじょう}二等陸曹と共に91式携帯地对空誘導弾、通称携SAMを抱えてブリッジの外へと飛び出してきた。

「携SAMは3基しかありませんのでこれを使って下さい、まあ、気休め程度にはなります。」

「気休めでも欲しいもんさ、こういう状況ではな」

長曽我部は苦笑を浮かべつつ、羽島が手渡してきたベルギーFN社製の軽機関銃MINIMIを受け取るとコッキングレバーを操作して薬室に5・56ミリNATO弾を装填する。

それを確認した羽島達が携SAMの射撃態勢を整えていると、ブリッジの夕風から新たな報告が送られて来た。

「飛行物体群が前進を開始しました。真っ直ぐこちらに向かい加速して来ます。編隊を崩さず、高度の上下もありません、攻撃行動では無く偵察飛行と思われまます！」

「総員、対空態勢を維持しつつ待機、一度フライパスさせる！羽島接近する機体の正体を確認してくれ！！」

「了！」

長曽我部の言葉を受けた羽島は、携SAMの発射器を肩から降ろすと双眼鏡を構え、正体不明の機体が接近してくるであろう方向に向ける。

それを確認した長曽我部は、トリガーから指を離れたままMINIMIの銃床を肩付けして銃口を飛行物体が飛来して来る方向に向け、甲賀と御子柴も携SAMの筒先を同じ方向へと向ける。

そのままジリジリと時間が経過する中、ブリッジの夕風からの報告が無線機に流れる。

「飛行物体更に接近、速度を落とし始めました。」

そして、夕風の言葉を合図にしたように羽島が双眼鏡を構えたまま口を開く。

「確認しました！かなり小さい、OH-6よりもちいさ…って、何だありゃ！？」

「どうした？」

長曽我部がMINIMIを構えたまま、すつとんきょうな声をあげる羽島に声をかけると、羽島は苦笑を浮かべながら長曽我部に双眼鏡を手渡す。

「直接確認して下さい…その方が手っ取り早い」

長曽我部は羽島の言葉を受けると、肉眼でも小さな点として確認出来るまでになった飛行物体に双眼鏡を向ける。

「…まいったな…」

双眼鏡を覗く、長曽我部が苦笑混じりに呟きをもらすと羽島が肩を竦めながら口を開く。

「さて、どうします？ 幹候（かんこう）幹部候補生学校）じゃ空飛ぶ美少女達への対処法なんか教えてくれませんでしたよ。」

「そんな対処法どの国の士官学校でも教えちゃいないさ…少なくとも、俺達のいた世界ではな…」

長曽我部はそう答えると、近付いてくる空飛ぶ美少女達（ミーナ達）を静かに見詰めていた。

接触（前書き）

題名通りの内容です。これからも宜しくお願いします。

接触

アドリア海「極光」周辺空域

突如出現した大型船（「極光」）への偵察に出撃したミーナ達が、目標の上空に到着すると、その船はミーナ達の接近に気が付いたらしく洋上に停止しており、ミーナ達は空中に佇みながら見慣れぬ大型船を見詰めていた。

「何て大きさだ、我がカールスラント海軍の「ビスマルク」級より大きいぞ…」

停止している大型船を見詰めるバルクホルンが呟きをもらす傍らでは、サーニヤが猫耳の根元付近にエメラルド・グリーンに輝く鹿の角のような形状の搜索用魔導針（リヒテンシュタイン式魔導針）を具現化させ、それを用いて大型船のレーダー電波の調査を行い、エイラが調査中のサーニヤの周囲を警戒していた。

「サーニヤさん、どう？」

ミーナがサーニヤに声をかけると、サーニヤは表情を鋭くさせながら静かな口調で言葉を返す。

「凄く精度の高いレーダーを使用しています。リベリオンの新型レーダーより精度が高いかも知れません…」

サーニヤの言葉を受けたミーナは、困惑の表情を浮かべながら頷きつつ呟きをもらす。

「全体的な印象は、リベリオンが多数保有している自走式の浮きドックに似ているわね…巨大な事を除けば…」

ミーナがそう呟いていると、大型船を監視していたエイラが声を発した。

「中佐、ブリッジの後ろの広い所にいるヘンテコな柄の軍服着てる連中が動き出したぞ！」

エイラの声を受けたミーナが、視線を転ずると、巨大な船体の後部

に配置されたブリッジの後方の平坦なスペースに展開して、こちらを見上げていた見慣ぬ戦闘服に身を包んだ人々の一団に動きが生じていた。

指揮官らしい人物の所に、長い旗竿のような物を持った人物が駆け寄ると、指揮官らしい人物が何事かを伝え、それを受けた人物が旗竿らしき物を大きく掲げて見せる。

「白旗…」

旗竿の先、潮風を受けてはためく純白の旗を見たバルクホルンが眩しさをもらすと、ミーナが表情を幾分か緩めながら後方の三人に声をかける。

「降りてみるわ、トゥルーデ、後はお願い…」

「気をつけるよミーナ…」

バルクホルンの言葉を受けたミーナは、小さく頷きながら降下を開始すると、指揮官のいる所を目指した。

ミーナがブリッジ後方に到達すると、180センチを超える長身と整った精悍な面立ちを持った指揮官が歩を進めて来た。

「日本陸上自衛隊、特殊戦略作戦室所属の長曽我部基久一等陸尉です。」

鮮やかな敬礼と共に、指揮官が自己紹介をするとミーナは表情を引き締めながら答礼を返しつつ、言葉を返す。

「連合軍、第501統合戦闘航空団「ストライク・ウィッチーズ」隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は小さく頷くとミーナに向けて口を開いた。

「ミーナ中佐、先ず貴女の指揮する部隊の警報システムを発動させてしまった事に対してお詫びさせて下さい。そして、自分達は貴女の部隊に対して敵対行動をとるつもりが無い事もお伝えします。」
ミーナは長曽我部の言葉を受けると、表情を柔らかくしながら言葉を返した。

「了解です。聞きたい事は山ほどありますが、それはそちらも同じ

筈ですね。ここから北北東約25海里的地点に私達「ストライク・ウィッチーズ」の基地があります。貴方方にはそこに移動してもらいたいと思います。構いませんか？」

長曽我部はミーナの言葉を受けると、涼しげな微笑を浮かべつつ頷きながら言葉を返す。

「問題ありません。それと一つ提案がありますが宜しいでしょうか？」

長曽我部の言葉を受けたミーナは、怪訝そうな表情を浮かべながら頷き、それを確認した長曽我部は静かに言葉が続ける。

「自分を中心にした何名かを、貴女方に追従させて基地へ先発させて頂きたいのですが……」

長曽我部の言葉を受けたミーナは、困惑の表情を浮かべながら見渡しつつ口を開いた。

「でも、どうやって？見た所カタパルトは無さそうだし……」

ミーナの返答に対して長曽我部は小さな微笑を浮かべながら言葉を返す。

「アシはこちらで用意します。」

15分後アドリア海上空

ミーナとの会見を滞り無く済ませた長曽我部は、「極光」を「ストライク・ウィッチーズ」の基地へ向けて前進させると同時に、数名の随員を選抜し、ミーナ達から簡単な自己紹介を受けた後に「極光」に搭載されていた陸上自衛隊の主力中型輸送ヘリコプターUH-60JAへと乗り込み、先発して基地へと向かうべく、ミーナ達の案内を受けつつ前進を開始した。

「これ程完成されたヘリコプターを保有しているとはな……」
共に飛行を続けるUH-60JAに視線を送ったバルクホルンが小さく呟くと、ミーナは同意するように小さく頷きながら言葉を返す。

「カールスラントでも、FW―61を発展させたFa―223「ドラッヘ」が山岳猟兵への輸送用として開発・運用されているけど、この機体の完成度はそれを大幅に上回っているわ…」

「一体、何者なんだあいつらは…」

バルクホルンの呟きに対して、ミーナは小さく肩を竦めながら口を開く。

「それについては向こうも同じ事を思っているみたいね」

UH―60JA

「しかしどんな世界なんですかねーこの世界…」

UH―60JAのキャビンから、傍らを飛行するミーナ達に視線を送った羽島が呟きをもらす傍らでは、長曽我部が腕組みをしながら何事かを考え込んでいた。

「どうしたんですか長曽我部一尉^{さん}？」

羽島が怪訝そうな面持ちで声をかけると長曽我部は、傍らを飛行するサーニャに視線を送りつつ口を開いた。

「サーニャ・V・リトヴァク…偶然なのかな、これは？」

「何がです？」

怪訝そうな面持ちの羽島が言葉を返すと、長曽我部は静かに言葉を続けた。

「第656女子戦闘機連隊…」

長曽我部の言葉を受けた羽島はハツとした表情になると、サーニャに視線を向けながら口を開く。

「まさか、「スターリンググラー드의白薔薇」リーリャ・リトヴァク…だとしたら…」

そこまで言った羽島が、バルクホルンに視線を向けると長曽我部は頷きながら口を開く。

「世界空戦史上僅か2人しか存在しない300（スリーハンドレッ

ド）キラー、ゲルハルト・バルクホルン…」

「独ソのエースが同じ部隊に…本気でどういう世界なんですかね…
ここは…」

感慨深げに呟く羽島に対して長曽我部は短く言葉を返す。

「基地につけば分かるさ…少なくとも今よりはな」

長曽我部の言葉を受けた羽島は、小さく頷きながら座席に身を沈め、
彼等に乗せたUH-60JAはローター音を響かせながら、ウィツ
チ達と共に目的地を目指して前進を続けた。

到着（前書き）

設定を変更しました。当初時空跳躍に巻き込まれた人員は30名と
していましたが、作品を進めて行く上で人員的に問題が出てきたの
で人員数を150名に拡大致しましたm（
m

到着

「ストライク・ウィッチーズ」基地上空

長曽我部達を乗せたUH―60JAは、ミーナ達の誘導によって目的地である「ストライク・ウィッチーズ」の基地へと到達した。

「なかなか見事な物だな…」

長曽我部が、眼下に見える城館のような基地を見ながら呟いていると、基地からアドリア海へと延びる滑走路を通過して、小さな影が飛び出してくるのが確認された。

その影は段々と形をハッキリさせていき、やがて一人のウィッチの姿となってUH―60JAの傍らを飛ぶサーニヤの所へと近付くと親しげな様子でサーニヤへと近付いて行った。

「…確定的だな…」

サーニヤと仲良さげに話しているウィッチの、ストライカーユニットを確認した長曽我部が小さく呟くと、羽島が同意するように頷きつつ口を開いた。

「間違い無いでしょうね、何せ「黒いチューリップ」ですから…」

長曽我部が羽島の言葉に頷きながら、仲良く飛ぶサーニヤと新しいウィッチ、そしてそれを悔しそうに見詰めているエイラを眺めていると、UH―60JAが指定された着陸場所へ向けて降下を開始した。

微かな衝撃と共にUH―60JAが着陸すると、随員として乗り込んだ夕月薫^{ゆうづきかおる}二等陸曹と双子の妹の夕月雅三^{ゆうづきみやび}等陸曹がキャビンのドアを開け、長曽我部は羽島と甲賀に随員として乗り込んだ棚倉隼人^{たなぐらはやと}一等陸曹を促して大地に足を踏み出した。

長曽我部達が地面に降り立つと、ミーナ達が相次いで着陸を開始するのが確認された。

ミーナが静かに地面に降り立ち、次いでバルクホルン、エイラ、サ

ーニヤが着陸を終え、最後に新たなウィッチが着陸態勢に入った。両足に装着されたBf—109K—4に搭載されたDB—605Dがゆっくりと出力を低下させて行き、速度を段階的に低下させて行く。

クリーミー・ブロンドのショートヘアと髪をかき分けて生えたダックスフントの耳が柔らかく靡き、可愛げな面立ちの中、活動的に輝くサファイヤ・ブルーの瞳が彼女の美貌を引き立てている。

黒い軍服と薄緑のズボン（ズボンですズボンといったら以下略）という装いに身を包んだウィッチは、綿毛が地面に落ちる様に柔らかく着陸を行い、ダックスフントの尾が小さく揺れる。

長曽我部達が着陸したウィッチを眺めていると、着陸を終えてストライカーユニットを外したミーナが近付いてくると、ウィッチを見詰めながら口を開いた。

「彼女はエーリカ・ハルトマン：「ストライク・ウィッチーズ」に所属するウィッチの一人よ…」

（やはり、そうか…）

ミーナの言葉を受けた長曽我部は、サーニヤ達の所に近付いて行く、ハルトマンを見送りつつ内心で呟きをもらす。

（カラヤ・アイン、黒い悪魔、メッサーシュミットの星、ただ二人しか存在しない300キラーの一人にして、世界空戦史上最高の撃墜王、エーリッヒ・ハルトマン…どうやら偶然では無さそうだな…）
長曽我部は、そう思いながら背後に視線をむけ、羽島達が降りたのを確認すると、彼等を整列させてミーナに正対させ、自身は敬礼と共に口を開く。

「準備完了致しました。」

長曽我部の敬礼を受けたミーナが答礼と共に小さく頷いたのを確認した長曽我部は羽島に視線を送り、それを確認した羽島は頷きながら腰へ手を伸ばし、H&K（ヘッケラー&コッホ）社製の自動拳銃USPが収められたホルスターを取り外して長曽我部へと渡す。

長曽我部は頷きながらホルスターを受け取ると、自分のホルスター

を腰から外し、ミーナに向けて差し出しつつ口を開く。

「自分達が基地にいる間、これは貴女方にお預けします。」

長曽我部からの申し出を受けたミーナは、困惑の表情と共に言葉を返す。

「長曽我部一尉、私達は、貴方方を捕虜として連れて来た訳ではありません……」

「無論です。」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は、涼しげな微笑と共に言葉を続ける。

「これは自分達が貴女方に敵対するつもりが無い事の証です。それと、貴女の冷静な判断によって無用な衝突が回避された事への感謝も含んでいます。」

長曽我部の真摯な言葉を受けたミーナは、表情を柔らかくしながらホルスターを受け取ると穏やかな口調で言葉を発した。

「確かにお預りします。その代わり、基地内での安全については私が責任をもって保証します。では、基地を案内します。」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は小さく頷くと、羽島達を促しつつミーナに先導されて基地へと足を進めた。

魔女達

「ストライク・ウィッチーズ」基地ブリーフィング・ルーム

ミーナによってブリーフィング・ルームへと案内された長曽我部達は、ミーナが「ストライク・ウィッチーズ」の隊員達を呼んでくるまでの間、ここで待機しているように伝えられた。

長曽我部がそれを了承するとミーナはブリーフィング・ルームから退室し、長曽我部達は室内でミーナの帰りを待つ事になった。

長曽我部は、部下を解散させると静かにブリーフィング・ルームを見渡していたが、壁に地図がかけられている事に気付くとそこに足を進め、暫く地図を見詰めた後に口を開いた。

「成程、オラーシヤはロシアの事か…」

長曽我部が得心したように呟くと、地図の近くにいた棚倉が、頷きながら声をかけて来た。

「どうやら、そのようですね。そしてロマーニヤは南イタリア…国名はかなり違いますが、地名は我々の世界と同じようですね。」

「正に「似て非なる世界」だな…」

長曽我部がそう呟くと、棚倉は苦笑を浮かべながら言葉を返す。

「出来れば女性の服装も、我々の世界に似せて欲しかったですね、あの格好、目の保養を通り越して目の毒です。」

「全くだ」

長曽我部がそう言いながら小さく肩を竦めていると、ドアが開かれミーナに先導された「ストライク・ウィッチーズ」の隊員達がブリーフィング・ルームに入室して来た。

（全く、まるで深夜アニメの世界だな…）

長曽我部は、入室して来たメンバーを見ると内心で呟きながらも、表情を鋭くさせて口を開いた。

「一列横隊！」

長曽我部の短い号令が発せられた刹那、羽島達が流れるような動作で一列の横隊を組む。

それを確認した長曽我部が、横隊の最右翼に移動すると、ミーナも「ストライク・ウィッチーズ」のメンバーを整列させる。

「敬礼！」

長曽我部の号令と共に全員の右手が迷彩ヘルメットのこめかみ付近に上がり、ピタリッと音がしたように感じる程見事なタイミングで静止する。

「直れ！…」

ミーナが答礼したのを確認した長曽我部は、号令を発して敬礼の態勢を解くと、一步前に踏み出して口を開く。

「日本陸上自衛隊、一等陸尉の長曽我部基久です。」

言葉を終えた長曽我部が元の位置に戻ると同時に、羽島達も同じように姓名を名乗る。

「三等陸尉、羽島猛です。」

「陸曹長、甲賀源八。」

「一等陸曹、棚倉隼人。」

「二等陸曹、夕月薫。」

「三等陸曹、夕月雅。」

長曽我部達が名乗り終えると、今度はミーナが一步前に出て来ると口を開いた。

「第501統合戦闘航空団「ストライク・ウィッチーズ」指揮官のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。バルクホルン大尉やハルトマン中尉、サーニャ中尉にエイラ中尉の4名は既に紹介済みです。残るメンバーを紹介します。」

ミーナがそう言うと同時に、整列した美少女達の中から、純白の扶桑皇国海軍第2種軍装をスクール水着の上から着込んだ美女が前に出てきた。

ポニーテールに纏められた艶やかな黒髪と力強い光を宿す瞳、右目を覆う白い眼帯が印象的な眉目は、彼女が背負う日本刀（正確には

扶桑刀」を彷彿とさせる研ぎ澄まされた凄みを漂わせている。

「戦闘隊長の坂本美緒少佐だ。」

美緒の自己紹介を聞いた長曾我部は小さく頷きつつ、内心で呟きをもらす。

（眼帯に描かれた青斜め一本線のマーク、大日本帝国海軍を代表するエース・パイロット「大空のサムライ」坂井三郎…）

美緒が列に戻ると、続いてレッドブラウンの軍服に白のスボン（ズボンです↑開き直り）という装いにグラマラスな肢体を包み込んだ美少女が前に出て来た。

赤毛に近いオレンジ色のロングヘアと、蒼水晶の瞳が特徴的な美貌と、朗らかな雰囲気を持つ美少女は、長曾我部達を見渡しながら明るい口調で言葉を発した。

「あたしはシャーロット・E・イエーガー、階級は大尉で、皆からシャーリーって呼ばれてるよ」

（…人類史上初の水平速度での超音速突破記録保持者、チャック・イエーガー）

長曾我部が内心で呟いている間にシャーリーは列へと戻り、代わりに白い上着と青と白のボードー柄のズボン（縞パンでは、ありません）という装いの小柄な少女が前に進み出て来た。

ツインテールに分けられた黒瑪瑙の髪と、悪戯っぽく輝くコーラル・ブルーの瞳が、彼女の天真爛漫な雰囲気を一際強い物へとしている。

「あたしはねえ〜」

「ちよっとお待ちなさい！次は私の順番でしょう！！」

ツインテールの少女が自己紹介をはじめようとするのを遮って青を基調色とした服装と黒のストッキング姿の少女が抗議の声をあげる。柔らかなブロンドのロングヘアに金色こんじきの瞳と眼鏡が印象的な少女が抗議の声をあげると、ツインテールの少女はシャーリーの傍らに寄り添いながら口を開く。

「やだー、シャーリーの後はあたしなのー」

「何、訳の分からない事を言ってますの！」

「二人とも落ち着け。」

二人の様子を見た美緒が、天を仰ぎつつ声をかけると、ブロンドの少女が弾かれたように背筋を伸ばしながら頭を下げる。

「も、申し訳ありません坂本少佐…」

ブロンドの少女が頭を下げるのを見た、美緒が小さく肩を竦めながらツインテールの少女の方に視線を向けると、少女はシャーリーに寄り添ったまま、しょんぼりとした様子で頭を下げる。

「…ごめんなさい…」

ツイン・テールの少女がそう言うのと、シャーリーは少女の頭を優しく撫でながらあやすように言葉を発した。

「ルッキニー、今日は我慢だ、な」

「…ウン」

ルッキニーと呼ばれた少女は、静かに頷くと名残惜し気にシャーリーから離れて列へと戻り、ブロンドの少女が改まった様子でコホンツと咳をしながら口を開く。

「私はペリーヌ・クロステルマン中尉でありますわ。」

「あたしはねえ、フランチェスカ・ルッキニー少尉だよ。」

ブロンドの少女、ペリーヌに続いてルッキニーと呼ばれた少女が姓名を名乗り、長曽我部は小さく頷きながら内心で嘆息をもらす。

（自由フランス空軍トップエースのピエール・クロステルマンに、
イタリア王立空軍のトップ・エース、フランコ・ルッキニー…50
1の名は伊達では無い、と言う事だな）

長曽我部がそんな事を思いながら、「ストライク・ウィッチーズ」のメンバーを見詰めていると、ハイスクールの制服を彷彿とさせる上着と白のズボン（下着ではありません）に身を包んだ美少女が進み出て来た。

後ろで纏められた色素の薄い栗色のロングヘアと藍色の瞳は、穏やかな輝きを放ち、心地好い春風のような雰囲気醸し出している。

「リネット・ビショップ曹長です。」

（ビショップ…？確か、一次大戦中にビショップと言う名前のエー

スパイロットがいたはずだが…しかし、一次大戦のエースがそのまま出て来るとは思えんが…)

長曽我部が思案にくれていると、列の最左翼から、スク水の上からセラー服を纏った小柄な少女が前に出て来るとペコリと頭を下げ、その後に顔を上げる。

薄茶色のショートヘアと粒羅な瞳が印象的なその表情は、小柄な体つきと相まって小動物のような愛らしさを漂わせている。

「宮藤芳佳軍曹です。宜しくお願いします。」

そう言いつつ、もう一度頭を下げた芳佳に応じながら、長曽我部は心中で呟きを続ける。

(俄には信じられんが、恐らくは「空の宮本武蔵」むじこうよしかな 武藤義金…これに加えて)

長曽我部は「ストライク・ウィッチーズ」の隊員達の最右翼に位置するミーナに視線を送る。

(公爵ヴォルフ・ディートリッヒ・ヴィルケ、極めつけは…)
フルスト

最後に長曽我部はサーニャの横でポケットとした様子で佇むエイラに視線を送る。

(無傷の撃墜王、エイノ・イルマリ・ユーティライネン…まるでJG-44だな)

長曽我部はそう内心で呟いていると、芳佳が小首を傾げながら呟きをもたらす。

「一等陸尉ってどんな階級なんだろう？」

「あー、それあたしも思った！後、陸上自衛隊って何？」

長曽我部の傍らに立つ羽島は、芳佳に続いてルッキニーが声を上げるのを見ながら苦笑を浮かべつつ、口を開いた。

「賑やかな部隊ですね、まっ、こういう雰囲気は嫌いじゃありませんけど…」

「同感だな。」

長曽我部は羽島の言葉に対して頷きながら応じつつ、賑やかな声をあげる「ストライク・ウィッチーズ」隊員達を見渡した。

ネウロイ（前書き）

本作の原作の一つ「ゴジラVSビオランテ」は1989年の作品で自衛隊の装備品もそれに準じていました（一部を除く）が、本作での自衛隊の装備品は2010現在に準じておりますのでよろしくお願ひしますm（　）m

ネウロイ

ミーナは芳佳やルツキーニを落ち着かせると、長曽我部の方へ向き直り、苦笑を浮かべながら口を開く。

「ごめんなさい、賑やかな娘が多くて…」

ミーナがそう言うのと、長曽我部は頭を振りつつ穏やかな口調で言葉を返す。

「自分達への対応等を見ていれば、この部隊が如何程の実力があるのか垣間見る事が出来ます。国籍の違う皆を信頼という形で纏め上げている貴女に、一士官として敬意を表します。」

長曽我部は一旦言葉を区切ると、茶目っ気のある微笑を浮かべながら言葉を続ける。

「肩肘張らずに接する事が出来るのはありがたい事ですしね。」

「へえー、中々話が分かるじゃん」

長曽我部の言葉にミーナが応じるより早く、シャーリーが幾度か頷きながら口を開き、ハルトマンもホッとした表情を浮かべつつ口を開いた。

「最初にビシッと敬礼して来た時は、「あゝあ、お堅い軍人さんかよ…」って思ったけど、意外に物分かりが良いね、どこかのお堅い軍人さんに見習って欲しいよ」

「それは、私に言っているのか、ハルトマン？」

「誰もトゥルーデの事だなんて言っていないよ」

長曽我部は、ハルトマンがバルクホルンの言葉を柳のように受け流しつつ、悪戯っぽい笑顔を浮かべているを見ると微笑を浮かべ、続いてルツキーニと芳佳の方へと視線を向けながら口を開いた。

「ルツキーニさんと宮藤さんの疑問への答えですが、陸上自衛隊とは陸軍に相等し、一等陸尉は陸軍大尉に相等します。因みに羽島の三等陸尉は陸軍少尉に相等します…」

長曽我部は、そこで言葉を区切ると傍らの羽島へと視線を送り、肩

を叩きつつ更に憐れむような声を発した。

「災難だな、羽島、お前のヒエラルキーはただ下がりだ：」

「気にしてたのでその点はスルーして頂きたかったのですが：」

羽島が苦笑しながら呟くと、列の最左翼にいた雅が肩を竦めながら口を開く。

「羽島三尉はまだマシですよ。あたしの三等陸曹って他国では伍長に相等するんですよ。つまりあたしはヒエラルキー最下位：芳佳ちゃんもあたしの上官になるんですよ。」

雅はそう言っていると、芳佳の方に視線を向けると、敬礼しながら口を開く。

「宜しく願います、宮藤軍曹殿。」

雅がそう言いながら軽くウィンクして見せると、芳佳は頬を赤らめさせながら、慌てた様子で言葉を返す。

「え、ええーっ！そ、そんな困ります。」

あたふたと慌てた様子を見せる芳佳の姿に、「ストライク・ウィッチーズ」と陸上自衛隊員の双方から笑い声が上がり、それによって場の雰囲気是和やかな物へと変化して行った。

「大した連中だな」

その様子を見ていた美緒が、穏やかな表情を浮かべながら口を開くと、傍らに立つミーナが同意するように小さく頷きつつ言葉を返す。
「指揮官が優秀なのよ。でなければ、最初の接触があれだけ上手く行く筈が無いわ」

「そうだな、下手をすれば戦闘になる可能性すら、あった状況だからな：それが結果として何の衝突も起こらず。こうして私達と和やかに会談出来てしまうのだからな：」

「上層部にも、あの人みたいな人がいて欲しいと、心底思うわ：」
ミーナが美緒との会話を終えると、ブリーフィング・ルームを包んでいた笑い声が一瞬途切れ、長曽我部がそれを見計らったように声をかけて来た。

「所でミーナ中佐、この世界の精細も知りたいのですが、それより

も先に貴女方の敵についての精細を知りたいのですが…」

長曽我部の言葉を受けたミーナは、一瞬だけ驚いた表情を浮かべたが、直ぐにそれを消すと、表情を引き締めながら口を開いた。

「何故、敵がいると？」

「国籍の異なる部隊が一つの戦闘集団を形成しているという事は、この世界では、そうしなければ対抗し得ない何らかの敵対勢力が存在している、貴女方はその勢力に対抗する為に編成されたのでは無いかと推察しましたので…」

長曽我部の説明を受けたミーナは小さく頷くと、鋭い表情のまま、言葉を発した。

「話が早くて助かります。それでは、私達の敵についての説明に入ります。映像資料がありますので、着席して頂けますか？」

長曽我部はミーナからの言葉を受けると、羽島達を促して椅子に座らせると、自身も手近な所にあった椅子へ腰を降ろす。

陸上自衛隊側が着席したのを確認したミーナは室内を暗くすると、ブリーフィング・ルームに備え付けられている魔導映写機を操作して、映像を映し出す。

そうして現れた映像に映し出されているモノを目にした羽島達から、小さなざわめきが溢れる。

空中を静かに進む巨体は、かなりの部分が幾何学模様の黒い外皮で覆われていて、所々から覗く真紅の輝きが不気味さや禍々しさを際立たせている。ソレは長曽我部の視線の下、かなりの速度で飛行を続けていた。

「これが貴女方の敵ですか…」

長曽我部が、生物とも人工物とも言えない異形のモノが映し出されている画面に見詰めたまま口を開くと、ミーナは小さく頷きながら言葉を返した。

「アレが私達の敵、「ネウロイ」です。」

「ネウロイ…」

ミーナの説明を受けた長曽我部は、小さく呟きながら映像に意識を

集中し、異形の存在が映し出される画面を静かに見据えていた。

指揮官達の会話（前書き）

補足説明イタリア海軍は砲口径をインチ単位では無く、ミリ単位で表記していた為、「ヴィットリオ・ヴェネト」級（スト魔女2の設定では「リットリオ」級）の主砲口径は15インチでは無く、381ミリと書いております。

指揮官達の会話

長曽我部が、ネウロイの映像資料を見据えていると、ミーナがその隣りに腰を降ろし、映像を見詰めつつ声をかけて来た。

「この世界も、中々大変よ…」

「…どうやらその様ですね…」

長曽我部が嘆息と共に言葉を返すと、ミーナは穏やかな表情で言葉を重ねる。

「この世界、か…」

「何とも微妙な表現ですが、自分としてもそう表現するしか無いのが現状です。」

長曽我部がミーナの呟きに応じると、ミーナは小さく頷きながら、言葉を続けた。

「見慣れない大型船、ヘリコプター、貴方達の技術力が我々の技術力を上回っているのは、理解出来た。でも、単なる技術力の相違に止まらない違和感も同時に抱くようになった。貴方の「この世界」という言葉を耳にした時、漸く違和感の正体が分かった…」

ミーナは一度言葉を区切ると、長曽我部は頷きと共に口を開いた。

「我々は自分達の居た世界から、何らかの理由によって、貴女方の世界に跳ばされて来たのだと思います。貴女のお陰で最初の接触を無事に終える事が出来ました。感謝します。」

長曽我部がそう言って頭を下げると、ミーナは苦笑を浮かべながら言葉を返す。

「長曽我部一尉、私はむしろ貴方の指揮統制力に深い敬意を抱きます。突発事態に陥りながらの冷静沈着な対応、衝突が回避出来たのは、貴方の対応があったからこそだと、私は思います。」

「恐縮です。」

長曽我部はミーナの言葉を受けると、静かに言葉を返しつつ、映像で繰り広げられるネウロイとヴェネチア海軍や「ストライク・ウィ

ツチーズ」達との戦闘を見詰めた。

（厄介だな…）

長曽我部はネウロイを鋭い視線で見詰めつつ、内心で呟いていた。

（「ヴィットリオ・ヴェネト」級（正確には「リットリオ」）の砲撃を喰らっても生きているとはな…彼女（「リットリオ」）の搭載する381ミリ砲は50口径の長砲身砲だった筈、長砲身の381ミリ砲の齊発を喰らっても平気だとなると、シースパロー如きでは猫に引掻かれた程度のダメージしか与えられんな…）

長曽我部は、内心で呟きながら、映像を見据えていると、傍らに座るミーナが厳しい表情を浮かべながら口を開いた。

「現在ネウロイによってヴェネチアとロマーニャ北部が制圧され、戦線はジリジリと押し下げられているのが現状よ」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は、厳しい表情のまま頷きつつ映像を見詰め、映像は「ストライク・ウィッチーズ」達によってネウロイが撃破された場面で終了した。

映像が終了した事を確認した美緒は、椅子から立ち上がって室内を見渡したが、その視線が陸上自衛隊側の所で停止する。

そこには、先程まで和やかに「ストライク・ウィッチーズ」の皆と会話を交わしていた頃の雰囲気は無く、鋭く研ぎ澄まされた様な表情が美緒の視線を真っ向から受け止めていた。

（全く、大した連中だ…ミーナが高く評価しているだけの事はある…）

美緒はガラリッと雰囲気の変った陸上自衛隊側を見詰めると、大きく頷きつつ、鋭い口調で言葉を発した。

「今の映像にあったのが、我々の敵、「ネウロイ」だ、質問等があれば可能な限り答えたい…」

美緒の言葉を合図として、長曽我部達は次々に質問を行い、「ストライク・ウィッチーズ」側はそれに対して答えを返して行った。

白熱した議論の結果、陸上自衛隊側は「ネウロイ」の能力等について、一定の理解を得る事が出来た。

議論に一区切りがついたブリーフィング・ルームにはホッとした雰囲気漂い、ミーナは小さく伸びをしながら、芳佳とリネットに向けて穏やかな口調で声をかけた。

「一旦休憩しましょう、宮藤さん、リーネさん（リネット）、冷たい飲み物を用意してくれる？」

「「ハイ」」

ミーナの言葉を受けた芳佳とリーネが明るい声を上げた時、室内に不気味なサイレン音が鳴り響いた。

サイレンを受けた長曽我部が、弾かれた様にミーナに視線を向けると、ミーナは茜色の瞳に鋭い光を宿しながら口を開いた。

「…ネウロイが出現したみたいね…」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は、厳しい表情を浮かべながら、ミーナの言葉に同意する様に小さな頷きを返した。

出撃（前書き）

この場面のBGMはワグナーの「ワルキューレ騎行曲」でお願い
しますf（^^）；

出撃

ミーナは直ぐ様管制塔と連絡を取り、それを終わると室内を見渡しつつ、凜とした口調で言葉を発した。

「ヴェネチア海軍の偵察機が、南下するネウロイ多数を発見したわ、機数は約40：高速でアドリア海を南下中よ。」

「40だと！久方ぶりの大規模襲撃だな…」

ミーナの言葉を受けたバルクホルンが厳しい表情を浮かべながら呟くと、ミーナは頷きつつ長曽我部の方へ視線を向け、厳しい表情のまま言葉を続けた。

「ネウロイの進路上に「極光」がいます。」

ミーナの言葉を受けた長曽我部は、鋭い表情と共に頷くと、羽島達を見渡しつつ口を開いた。

「ヘリで「極光」に戻るぞ。」

羽島達が、長曽我部の言葉に頷いたのを確認したミーナは、「ストライク・ウィッチーズ」のメンバーを見渡しながら口を開いた。

「襲撃の規模が大きい為、全力出撃を実施します。長曽我部さん達の乗るUH-60JAを護衛しつつ「極光」へ移動、「極光」を護衛しつつネウロイを叩きます。」

「了解」

ミーナの言葉を受けた「ストライク・ウィッチーズ」の面々は瞳に鮮烈な光を宿しながら応答し、ミーナは頷きながら、力強く号令を下す。

「出撃！」

ミーナの言葉を受けた「ストライク・ウィッチーズ」の隊員達が、弾かれたように駆け出したのを確認した長曽我部は羽島達に視線を向けながら口を開いた。

「我々もヘリに急ぐぞ」

「了解！！」

羽島達は叩き付ける様に応じると、長曽我部を先頭にブリーフィング・ルームから飛び出していった。

格納庫

長曽我部達が慌ただししい空気に包まれた格納庫に到達すると、そこではウィッチ達が次々に発進準備を整えている所であった。

ストライカー・ユニット装着装置に到達したウィッチ達は各々のストライカー・ユニット装着装置に駆け寄ると、愛用のストライカー・ユニットに足を潜り込ませて行き、格納庫を淡い輝きが明るく照らしていた。

DB―605Dを起動させ、灰色狼の耳と尾を風に靡かせているミナーナの隣では、美緒が愛用ストライカー・ユニット「紫電」五三型へと足を差し込み、魔導エンジンMk―9（扶桑皇国陸海軍統合呼称マー43）が美緒の魔力に呼応して唸りを上げ、美緒の頭と臀部からドーベルマンの耳と尾が現出した。

美緒が装着装置を操作して、火器収納スペースから九九式機銃二号二型改を取り出していると、シャーリーとルッキニーが隣り合って置かれたストライカー・ユニット装着装置に駆け寄り、ストライカー・ユニットを装着する。

シャーリーが愛用ストライカー・ユニット、P―51D「ムスタング」に足を差し込むと、魔力を流し込まれたマーリン魔導エンジンが軽快な唸りを発し、グラマラスな肢体が、淡い輝きに包み込まれると同時に、髪を掻き分けてウサギの耳が現出し、ウサギの尾が風を受けて小さく揺れる。

シャーリーの傍らではルッキニーがストライカー・ユニットG55「チェンタウロス」に足を差し込み、RA―1050RC58「ティフォーネ」魔導エンジンを起動させ、黒豹の耳と尾を風に靡かせている。

シャーリーがM―1918A2（BAR）を、ルッキニーが12・

7ミリ機銃S A F T Aを装備し終えた傍らではストライカー・ユニットを装着したペリーヌがブレン軽機関銃を手に発進態勢を整えていた。

ストライカー・ユニットV G・39 b i s 2に搭載されたクワドラ12 Y―89魔導エンジンが、ペリーヌの魔力によって唸りをあげ、シャトルリユールの耳と尾が魔導プロペラの起こした風に受け、小さく靡いている。

格納庫が魔導エンジンの咆哮に満たされる中、最後にリーネと芳佳が到着し、ストライカー・ユニット装着装置へと駆け寄る。

リーネがストライカー・ユニット「スピットファイヤーM k・22」に両足を差し込むと、淡い光が彼女の肢体を包み込み、スコティッシュ・ホルドの耳と尾が具現化される。

魔力を受けた「グリフィン」魔導エンジンが轟音を響かせる中、リーネは傍らの火器収納スペースに手を伸ばすと、ボーズM K・1対戦車ライフルを抱えあげ出撃態勢を整える。

一方の芳佳はストライカー・ユニット「零戦」二二型甲を両足に装着し、搭載されている栄二一型魔導エンジンが轟音を轟かせていた。魔導プロペラの起こした風に柴犬の耳と尾を靡かせ、九九式機銃二号二型改を構える表情は決意に輝き、瞳が力強く輝いていた。

「…いい表情^{カオ}してますね、皆…」

「全くだ。」

長曽我部は羽島の言葉に頷くと、全員を促すと発進態勢を整えているU H―60 J Aへと駆け寄った。

「行けるか？」

「何時でも行けます！」

長曽我部が機外で出迎えたヘリパイ（ヘリコプター・パイロット）に声をかけると、ヘリパイは即座に言葉を返し、長曽我部はそれに頷きながら羽島達を乗り込ませる。

最後に長曽我部が乗り込んだのを確認したヘリパイはコクピットに乗り込むと、手早くエンジンを始動させる。

T-700-IH-401Cエンジンが出力を増大させ、メインローターがゆっくりと回転を開始する中、長曽我部が滑走路へと視線を向けると、「ストライク・ウィッチーズ」の皆がミーナを先頭にして次々に蒼空へ駆け上がって行く様子が確認された。

「さながら「戦乙女の騎行」だな……」

長曽我部が感慨深げな呟きをもらすと、それを合図としたようにUH-60JAの機体がフワリッと浮き上がり、ローター音と共に上昇を開始した。

上昇を続けたUH-60JAは、「ストライク・ウィッチーズ」と合流すると、美しき戦乙女達と共に、「極光」のいる海域に向けて前進を開始した。

決断（前書き）

補足説明

飛行教導隊、航空自衛隊の保有するアグレッサー飛行隊であり、航空自衛隊から選りすぐられたパイロットが集められた航空自衛隊最強精鋭部隊

「極光」にはレーダー操作員として航空自衛官等も乗り込んでいて、この話のオペレーターは飛行教導隊の実力を知っている為、思わずその名前を出してしまったという設定であります。

決断

「極光」

「ストライク・ウィッチーズ」の護衛の下、「極光」へと到着したUH-60JAは直ちにヘリポートに着陸し、長曽我部達はブリッジに詰める夕凧達に合流した。

「長曽我部一尉、現在我々は接近中の国籍不明機の集団から、遠ざかる方向に進路を向けています。一体、この集団は何者なんですか、無線では特殊な存在の敵だと仰っていましたか？」

到着した長曽我部に対して、夕凧が怪訝そうな面持ちと共に声をかけると、長曽我部は小さく頷きながら言葉を返した。

「接近中の集団の名前は「ネウロイ」、我々の世界で言うならば、Gが最も近い存在だな…」

長曽我部の言葉を受けたブリッジの一同に緊張の表情が浮かび上がる中、レーダー・オペレーター（一等空曹）が警告を発した。

「国籍不明機の集団、更に接近中です。距離50海里、本船上空に展開する「ストライク・ウィッチーズ」が前進を開始しました。」

「仕掛ける気ですね、彼女達…」

長曽我部は羽島の呟きに頷きながら、レーダー・オペレーターへと声をかけた。

「本船の上空に「ストライク・ウィッチーズ」はいるか？」

「本船上空にブリッツ（輝点）が四つあります。本船の直俺隊と制空隊に別れて行動しているものと思われま

ちよくえん

す。」

長曽我部はオペレーターの報告に頷くと、夕凧に向けて口を開いた。
「佐伯、スーパース2及び、MBF-Xの状況はどうなっている？」

長曽我部の言葉を受けた夕凧は、表情を鋭くさせながら言葉を返す。

「…宜しいのですか？」

「この世界について正直まだ何も分からん状態だが、一つだけ確か

な事がある。」

長曽我部はそう言いながらブリッジの天井を見上げた。

「この上では、正体も定かでは無い我々の為に、「ストライク・ウィッチーズ」が展開して護衛に当たってくれている…それだけで十分だ。」

「…了解しました。」

夕風はそう答えると、船内電話を取り、ドックと連絡を交わす。その直後にレーダー画像を注視していたレーダー・オペレーターが緊迫した様子で口を開く。

「長曽我部一尉、「ストライク・ウィッチーズ」がネウロイと交戦に入りました！…凄い、ネウロイのブリッツが3つ消失！続けて2つのブリッツも消失！なんて強さだ…飛行教導隊並みです…」

「極光」に乗り組む前は新田原基地にゅうたばるに所属していたオペレーターが、感嘆の呟きをもらす中、通話を終えた夕風が船内電話の受話器を置きながら口を開いた。

「長曽我部一尉、スーパードック2は問題ありません、ただMBF-Xについては現在エンジンの最終調整作業を行っている為、発進が遅れると天龍寺一尉から連絡がありました。」

夕風の言葉を受けた長曽我部は小さく頷くと、羽島達に視線を向けながら口を開いた。

「クルーは俺の他に、羽島、棚倉、薫の3名だ。」

「…了」

長曽我部は羽島達が応じたのを確認すると、3人を促しつつブリッジから駆け出して行った。

それを確認した夕風は、再び船内電話の受話器を取ると、口を開いた。

「ブリッジより第2ドック、スーパードック2緊急発進！スクランブル繰り返す、スーパードック2緊急発進！スクランブル」

「極光」第2ドック

長曽我部達は、スクランブル命令を受け、慌ただしい雰囲気に包まれる「極光」の第2ドックに到着するとコントロール・ルームに直行した。

長曽我部達がコントロール・ルームに入ると、強化防弾ガラス越しに、出撃準備が整えられている特異な形状の機体がクルーである彼等を出迎えた。

航空機ともヘリコプターとも異なる、平らな形状が特徴的な濃緑色の機体を目にした羽島は、小さく肩を竦めながら眩きをもらす。

「開発した連中、まさかコイツがG以外と戦う事になるとは、夢にも思っていないでしょうね…」

長曽我部は、その言葉に同意するように頷きつつ 口を開いた。

「何しろ対G兵装の切り札として開発された機体だからな…行くぞ…」

「了」

羽島の言葉を合図としたように長曽我部達は行動を再開すると、コントロール・ルームから伸びる可動式通路を使って、機体の右側に配置されているブリッジのような構造物へと歩みを進めた。

入口に到達した長曽我部が、虹彩・指紋・声紋複合認識システムを利用してロックを解除すると、微かな駆動音と共に扉が開き、長曽我部達は内部に歩を進めた。

長曽我部が機長席に着席すると同時に、右隣の副長席に羽島が腰を降ろし、二人の後方に位置する解析員席と火器統制員席に棚倉と薫が、それぞれ着席した。

長曽我部達がスイッチ類を操作すると、操縦席内部が蛍光照明で明るく照らし出され、各種計器類のランプに発進態勢完了を意味するグリーンの光が灯って行く。

全システムが稼働状態になった事を確認した長曽我部は無線のレシーバーを装着した後に、ブリッジに向けて通信を送る。

「ブリッジ、こちらスーパーX2、全システム、オール・グリーン、

発進準備を完了した。送レ」

「スーパーX2、こちらブリッジ、了解しました。直ちに天井ゲート部を開放します。MBF-Xについては発進態勢が完了次第直ちに追従させます。送レ」

「スーパーX2、了、終ワリ」

「メイン・エンジン始動」

長曽我部が、ブリッジとの交信を終えたのを確認した羽島が短く告げながらエンジンを始動させると、メイン・エンジンが咆哮を上げ、無人となったドック内を凄まじい轟音で満たして行く。

そしてそれを合図としたように天井が起動音と共に左右に開いて行き、スカイブルーの蒼空が姿を現すと同時に、地中海の陽射しが濃緑色の機体に向けて燦然と降り注ぐ。

「メイン・エンジン出力120%、発進準備完了！」

羽島からの報告を受けた長曽我部は、迷い無き光を瞳に宿しつつ、鋭い口調で号令を発した。

「スーパーX2、発進！」

その言葉と共にメイン・エンジンが轟音を轟かせ、発生した推力を受けた機体：DAG-MBS-02・Super-XX、通称スーパーX2は静かに異界の蒼空へと上昇して行った。

戦乙女の舞(前書き)

15000PVアクセス突破&3000ユニークアクセス突破((^^;)

ありがとうございますm (mこれからも本作を宜しく願います ((^^;)

戦乙女の舞

「極光」上空

「極光」直俺の任についていた美緒、ペリーヌ、リーネ、芳佳の4人は「極光」のゲート部が左右に開き、そこから見馴れぬ特異な形状の飛行物体（スーパードッグ）が上昇してくるのを、怪訝そうな面持ちで見詰めていた。

「何だ…あれは…」

「あんな機体、見た事も聞いた事もございませんわ」

美緒とペリーヌが呟く傍らでは、芳佳とリーネが不思議そうに上昇してくる機体を見詰めていた。

「芳佳ちゃん、アレ、何だろうね？」

「何だろうね、あれ、機体の横に何か書いてある。」

リーネの言葉に応じていた芳佳が、見馴れぬ機体の側面に何かが書かれているのに気付いて呟きをもらす。

芳佳の言葉を受けたリーネは、魔力によって視力を大幅に向上させた藍色の瞳を見馴れぬ機体に向けると書かれている文字に視線を向けた。

「スーパードッグって書いてあるよ…」

「…スーパードッグ…」

リーネの言葉を受けた芳佳が、言葉を反芻はんすうすると、それを耳にした美緒が口を開く。

「どうやらあの機体の名称らしいな…恐らくは陸上自衛隊の連中が保有する機動兵器だな…」

「私達と一緒に、戦うつもりでしょうか？」

美緒がペリーヌの疑問に答えようとすると、耳のインカムに見馴れぬ機体からの通信が入って来た。

「坂本少佐、こちらは長曽我部一尉です、驚かせてしまい申し訳あ

りません。」

長曽我部の声を受けた坂本は、小さく肩を竦めながら言葉を返した。

「何事かと思ったぞ：スーパーX2と言うのがこの機体の名前か？」

「ええ、DAG—MBS—02・SuperX^{ダブルエックス}2、それがコイツの名前です。」

長曽我部の言葉を受けた美緒は、その言葉に頷きながら言葉を重ねる。

「ネウロイの概況を理解している貴官が出撃させたのだ、勝算があると判断したと見ていいんだな？」

「正直な所、不確定要素が多いので何とも言えませんが、我々の装備の中で、ネウロイに効きそうな装備の一つではあります。なお、現在「極光」では別の機体が2機、第2陣として出撃を準備しています。これよりスーパーX2はミーナ中佐率いる「ストライク・ウィッチーズ」本隊の援護に向かいます。」

美緒は長曽我部の言葉を受けると、小さく頷きながら言葉を返す。

「分かった、我々は「極光」の直俺を行う。期待しているぞ：」
「了解しました。」

美緒が交信を終了すると、スーパーX2は速度を上げて、ミーナ達がネウロイと交戦を繰り広げている空域へと前進を開始した。

「坂本さん、大丈夫なんですか？」

芳佳が不安そうな面持ちで声をかけると、美緒は頷きながら言葉を返す。

「ああ言うタイプの軍人は、出来る事と出来ない事を冷静に判断した上で行動している。そんなあいつがやれると判断したのなら、私はその判断を尊重したい。」

（凄いな、あの人…）

芳佳は、美緒の言葉に小さく頷きながらスーパーX2を指揮している長曽我部へと思いを馳せる。

（出会ってから、ほんの少ししかたってないのに、ミーナ隊長や坂本さんに信頼されている。皆とも直ぐに打ち解けたし、本当に凄い

人…)

芳佳がそう思いながらスーパーX2を見送っていると、リーネが穏やかな口調で声をかけて来た。

「芳佳ちゃん、私達は「極光」をしっかりと護らなきゃいけないね。」

「リーネちゃん…ウン、そうだね…」

芳佳はそう言いながら、リーネに向けて力強く頷き返すと、再び視線をスーパーX2が飛び去った方向に向けると、静かに口を開いた。

「頑張って下さい、長曽我部さん、私達も「極光」を護り抜きます。」

芳佳はそう呟くと小さくなって行くスーパーX2を見詰めていた。

「ストライク・ウィッチーズ」本隊

「極光」から約50海里離れた海域の上空では、ミナ率いる「ストライク・ウィッチーズ」本隊がネウロイの群れと激闘を交わしていた。

スカイブルーの蒼空に、幾条ものコントロールが軌跡を描き、ネウロイの放つビームの真紅の火線と、ウィッチ達のシールドが激突して、眩い閃光が蒼空のそこかしこで閃いている。

多数のネウロイの放つ十字砲火の中、「ストライク・ウィッチーズ」に所属する戦乙女達は、艶やかに、そして凄絶に舞っていた。

「行くぞ、ハルトマン」

「いいよ、トゥルーデ」

瞳に鮮烈な光を宿しながら呟いたバルクホルンは、ハルトマンののんびりとした応答を受けると、眼前に展開する小型ネウロイ4機に向けて突撃を敢行する。

4機のネウロイが次々に発射するビームを容易く回避したバルクホルンは両手に装備したMG-151/20を構えると、白く繊細な指先がトリガーを操作した。

刹那、MG―151／20が轟然と唸り、銃口からマズル・フラッシュの閃光と、カールスラント製特殊炸裂弾M―geshossがミゲシヨス迸り出た。

豪雨のように叩きつけられたM―geshossがネウロイを強かに穿ち抜き、2機のネウロイが空中で四散し、破片が陽光を受けてダイヤモンド・ダストの様に煌めく。

残ったネウロイが慌てて離脱しようとした瞬間、ハルトマンが四散するダイヤモンド・ダストを突き抜けて到着すると、流れるような動作でMG―42を構えて射撃を行い、降り注ぐ7・92ミリ弾が瞬く間に残るネウロイを粉碎し、破片が空中に飛び散って行く。

その頃、別の空域では、シャーリーとルツキーニが、小型ネウロイと交戦を行っていた。

シャーリーの魔力を受けたマーリン魔導エンジンが、高らかな咆哮と共に出力を上昇させ、グラマラスな肢体を一気に加速させて行く。シャーリーは、シールドによってビームを弾き返しながら一陣の疾風^ぜとなって駆け抜けると、すれ違いざまにBARの射撃をネウロイに浴びせかけ、標的となったネウロイを破碎する。

高速で離脱するシャーリーに追いつくとするネウロイだったが、間髪入れずに攻撃態勢に入ったルツキーニがSAFTAの射撃を浴びせかけ、降り注ぐ12・7ミリ弾がネウロイを穿ち抜く。

直線的なシャーリーの戦闘法に対して、ルツキーニの戦闘法はさながら気紛れな猫を思わせる程、変幻自在と言えた。

シャーリーのような高速の一撃離脱を行ったかと思えば、巧みな機動戦術を行いネウロイを翻弄し、粉碎して行く。

ルツキーニの小柄な身体が蒼空を軽やかに舞う度に、空中に四散したネウロイの破片が陽射しの中で煌めき、輝く破片の直中をシャーリーのグラマラスな肢体が駆け抜けて行った。

絶妙のコンビネーションで戦うシャーリーとルツキーニ達から程遠からぬ空域ではエイラとサーニヤが、3機の小型ネウロイに護衛された中型ネウロイを標的に定めていた。

「サーニャ、行くぞ…」

「…ウン」

サーニャは、エイラの言葉に小さく頷くと、自分の手を差し出されたエイラの手を重ねた。

エイラは、それを感じると、一瞬だけ瞳を閉じて意識を集中させた。

「サーニャ、手、離すなよ…」

「ウン」

サーニャの相槌を耳にした瞬間、エイラは瞳を開くとサーニャの手を握ったまま、ネウロイに向けて急降下を開始した。

護衛の小型ネウロイと標的となった中型ネウロイが無数のビームを発射し、蒼空が毒々しいまでの真紅の火線に埋め尽くされる。

四方八方から襲いかかる十字砲火の中、エイラはサーニャの手を握ったまま易々と標的のネウロイへと接近する。

回避不能とさえ思える程のビームの雨を、エイラとサーニャは軽々と回避しながら前進して行き、中型ネウロイを攻撃範囲内へと捉える事に成功した。

刹那、エイラが握る手に優しく力を入れ、それを感じたサーニャはエイラの手を握り返しながらAM―35A魔導エンジンの出力を僅かに上昇させて、エイラに近付く。

エイラは、握った手を引き上げてサーニャの小柄な身体を自分の身体の前に引き上げると、握っていた手を外してサーニャの細い腰に手を回して、身体を固定させる。

サーニャはエイラに抱えられながら、フリーガーハマーを中型ネウロイに向けると静かにトリガーを操作して、ロケット弾をネウロイへと叩き込む。

エイラは、サーニャが至近距離から撃ち込んだロケット弾が炸裂して、ネウロイの表皮が引き剥がされ、クリスタル・レッドに輝くコアが露になったのを確認すると、MG―42の射撃によってそれを粉碎する。

中型ネウロイが爆散する中、エイラはMG―42を操作して護衛の

小型ネウロイ3機までも叩き落としてしまうと、若干名残惜し気にサーニャの腰から手を離れた。

「大丈夫だったか、サーニャ？」

「ウン、ありがとう、エイラ」

エイラはサーニャの言葉に嬉しそうに頷くと、サーニャを促して、新たなネウロイを求めて前進して行った。

「皆、よくやってるわね」

激しい空戦の渦の上空から、戦鬨の推移を確認していたミーナは、安堵の表情と共に呟きをもらしていた。

一定の速度で飛行を続けるミーナの背後に、乱戦の渦を潜り抜けた小型ネウロイ2機が忍びよると、静かにミーナの背後に接近して行く。

ミーナは接近して来るネウロイに気付いていない様子で静かに飛行を続け、ネウロイは更に接近するとミーナに向けてビームを発射した。

その刹那、ミーナは急速に減速しながら上体を起こして発射されたビームを回避し、予想外の急減速によってネウロイをオーバーシュートさせてしまう。

「気付いていないと思ったの？」

ミーナは静かに呟きながらMG-42の銃口をネウロイに向けると、瞬く間にそれを撃墜し、改めて戦鬨の推移を確認する。

当初40機以上の大群であったネウロイは、10機程度にまで打ち減らされ、現在は3機的大型ネウロイを中心にした防御陣形を組んでミーナ達に相対している。

「厄介ね。」

強固なネウロイの陣形を見たミーナが呟きをもらすと、「極光」の直俺に当たっている美緒からの通信がもたらされて来た。

「ミーナ、こちら坂本だ。「極光」から長曽我部が出撃した。そちらの援護に回るとの事だ…」

「長曽我部一尉が？」

「あいつは、ネウロイがどんな存在なのか、大まかに理解した上で、出撃する事を選択したんだ、かなりの勝算があって行動していると見ていいだろう…そう言う訳で長曽我部が指揮する機動兵器が接近している。かなり変わった外見の機体だから驚くなよ。」

「…了解」

ミーナが、怪訝そうな表情を浮かべたまま交信を終えると、ミーナの周辺にバルクホルン達が集まって来た。

「ミーナ、陸上自衛隊の連中が出撃したと言う話らしいが、本当なのか？」

バルクホルンが困惑の表情で声をかけてくると、ミーナは小さく頷きながら言葉を返す。

「美緒からの連絡よ、接近している機体はかなり特異な外見をしているみたいよ。」

「特異な外見？」

バルクホルンが訝しげに呟いていると、周囲を見渡していたルツキーニが声をあげた。

「あれっ、何か近付いて来るよ、アレじゃ無いの？」

ルツキーニの言葉を受けたミーナ達が、視線をそちらに向けると、美緒の言葉通りの特異な外見が特徴的な機体が、かなりの速度で接近して来るのが、確認された。

戦闘（前書き）

本作のスーパーX2は「ゴジラVSビオランテ」本編に登場したスーパーX2の試作機と言う設定になっており、武装に変更点があります。詳しくは後書きに記載しております。

戦闘

「何だ、ありゃ…」

接近してくる、特異な外見の機体を目にしたシャーリーが、戸惑いの声をあげると、シャーリーの傍らにいるルツキーニがコーラル・ブルーの瞳を細めながら機体の側面に書かれた文字を読み取る。

「スーパ―X2って書いてるよ…」

「スーパ―X2…」

ルツキーニの言葉を受けたミーナが小さく呟きをもらしていると、インカムにスーパ―X2からの通信が到達した。

「ミーナ中佐、こちらは長曽我部です。我々もネウロイの迎撃を実施します。」

「長曽我部一尉…」

ミーナは、長曽我部の言葉を受けると一瞬だけ口を閉ざしたが、直ぐに表情を鋭くさせながら言葉を返した。

「分かりました。無理はしないで下さい。」

「了」

スーパ―X2の機長席に座る長曽我部はミーナの言葉に短く応じると、前方モニターに視線を向けたまま、後方の棚倉に声をかける。

「棚倉、ネウロイの状況確認せよ」

「ネウロイの総数は小型7、大型3の合計10、現在は大型3機を中心に展開して、防御陣形を構築しています。つまり4分の3は「ストライク・ウィッチーズ」に叩き落とされた、という事ですね…」

「凄まじい実力だな…」

長曽我部は、感嘆混じりに呟く棚倉の言葉に応じると、続けて火器統制官席の薫に対して声をかけた。

「薫、フォックス2を使用する。」

「了、フォックス2、スタンバイ…」

薫が復唱と共にコンソールを操作すると、スーパ―X2の機体上面

後部の可動隔壁が開き、機体内部から93式空対艦誘導弾3発が装填されたランチャー・ユニットが姿を現した。

「あれは…ミサイルか!？」

「間違い無いわね…」

ランチャー・ユニットを目にしたバルクホルンが、驚きの声をあげるとミーナは小さく同意の呟きをもらした。

(やはり、技術力については相当あちらが進んでいるわね…カールスラントでも対空用有線誘導式ミサイルのX-4や、対地・対艦用の無線誘導式ミサイルのHs-239が開発されているけど…外見から判断しただけでも、完成度の差が歴然としているわ…)

ミーナが内心で呟きをもらしている頃、スーパーX2の機長席で長曾我部はネウロイを見据えながら命令を下す。

「薫、目標前方大型ネウロイ、フォックス2発射!」

「フォックス2ファイヤー!!」

長曾我部の号令を受けた薫が、叩きつけるように応じながら発射ボタンを押し込むと、93式空対艦誘導弾が発射煙と共に次々に解き放たれると、レーダーによる誘導を受けながら標的となった大型ネウロイに向けて突進して行った。

「おおー、凄えー」

「いっけえー!」

シャーリーとルッキーニが歓声をあげる中、3発の93式空対艦誘導弾は大型ネウロイへと接近して行くが、その途中でネウロイが迎撃の為に発射した無数ビームに絡め取られてしまい、目標である大型ネウロイの遙か手前で破壊されてしまう。

「…アレ?」

意外な事の成り行きに、シャーリーとルッキーニが戸惑いの声をあげている頃、スーパーX2の機内では、羽島が諦念混じりの笑みを浮かべつつ呟きをもらしていた。

「まあ、予想されていた通りの結果ですね。」

「そうだな…大型ネウロイの火力で、あんな防御陣形組まれたら対

艦ミサイルを100発単位でぶち込んでも無理だろうな…」

「データメな機動性のウィッチにすら、ビームを命中させてる連中ですからね、ミサイル程度は余裕で叩き落とせますね…」

長曽我部が、ぼやく様に呟く羽島の言葉に頷いていると、解析員席の棚倉が警報を発した。

「ネウロイに動きがあります。小型が4機、こちらに向けて接近を開始しました！」

「薫、小型は機動性が高くミサイルが追尾しきれない可能性がある。フォックス3にて迎撃！」

「了、フォックス3、スタンバイ…」

薫が復唱と共に兵装をフォックス3に切り換えると、ランチャー・ユニットがスーパードX2の機内へと収納され、それと同時に機体の左右から格納式銃架に固定された大型のガンポッドが姿を現した。

そうしてスーパードX2が射撃態勢を整えると同時に、4機の小型ネウロイがスーパードX2に接近すると、ビームを次々に発射した。

「いかん、当たるぞ！」

真紅の光条が、スーパードX2の機体に吸い込まれて行くのを確認したバルクホルンが声をあげるが、次の瞬間には、その瞳が大きく開かれ、口から驚愕の叫びが飛び出す。

「馬鹿な!？」

驚愕の表情を浮かべたバルクホルンの視線の先には、ビームの直撃を受けながらも平然とした様子で飛行を続けるスーパードX2の姿があった。

「…マジかよ…」

「すごい装甲…」

ネウロイのビームを耐え切ったスーパードX2の姿に、シャーリーとルッキニーが感嘆の呟きをもらす中、ミーナは鋭い表情を浮かべながらスーパードX2を見詰めていた。

（確かに物凄い装甲、でも、あの装甲はミサイル等の通常兵器に対しては、明らかに過剰装甲、あの機体、一体何と戦う為の機体なの

…)

ミーナが思惑顔で見詰める中、スーパーX2がビームの着弾を凌ぎつつ反撃へと転じる。

「棚倉、被害状況報告!」「機体数カ所にビームを被弾、現在の所、TA-32に問題は生じていません、ただ無限に防げると言う訳では無さそうです。微弱ですがダメージは蓄積されています。引き続き、ネウロイのビームの解析作業に入ります。」

「了、手早く頼む!薫、フォックス3、自由射撃!」

「フォックス3、ファイヤー!!」

長曽我部の命令を受けた薫が、間髪入れずに発射ボタンを操作すると、コンマ何秒かのタイムラグの後に、左右のガンポッドに1門づつ装備された30ミリガトリング砲、GAU-8「アベンジャー」の銃身が高速で回転を始め、銃口からAPDS（装弾筒付徹甲弾）と焼夷榴弾が濁流となって迸り出る。

スーパーX2の射撃を浴びたネウロイは即座に散開をはじめが、離脱の遅れた小型ネウロイが降り注いだAPDSに外皮を引き剥がされ、炸裂する焼夷榴弾にクリスタル・レッドのコアを爆砕されて、スカイブルーの蒼空に、破片を四散させられる。

スーパーX2からの反撃を受けたネウロイは、散開して攻撃を続け、スーパーX2も果敢に応戦を続けるが…

「膠着状態だね…」

眼前で繰り広げられるスーパーX2と小型ネウロイの戦闘を見詰めるハルトマンが小さく呟くと、ミーナは同意するように頷きつつ内心で呟きをもらす。

（互いに決め手を欠いている…）

圧倒的なまでの装甲と高い火力を持つスーパーX2と、軽快な機動性とフォーメーション戦術が持ち味の小型ネウロイの戦闘は一種の膠着状態になりつつあった、ネウロイの攻撃はスーパーX2の特殊耐熱合金TA-32によって防がれ、一方スーパーX2が放つGAU-8も機動性に優れるネウロイを、中々捉える事が出来ないでい

る。

「どうするミーナ、支援に向かうか？」

バルクホルンの言葉を受けたミーナが答えるより早く、スーパ－X2のGAU－8が2機目の小型ネウロイを漸く捉え、ネウロイがただの一撃で粉碎される。

2機目が撃墜された事によって、ネウロイの側に新たな動きが発生し、局面が動き出す。

2機のネウロイは仲間の陣形の所へと退却して行き、変わりに3機的大型ネウロイが前面へと進出して来た。

一方、スーパ－X2の機長席からネウロイの行動を注視している長曾我部の元に棚倉から待ち望んだ報告が入る。

「解析終了！適合率90%オーバー！Gの熱線とほぼ同タイプ。いけます！」

長曾我部が棚倉の言葉に大きく頷いた時、無線機にミーナからの通信が到達する。

「長曾我部一尉、ネウロイは大型個体を中軸にした戦闘を挑んで来ると思われます。注意して下さい……」

「こちらでも確認しました。こちらにとっては、その方が好都合です。」

「好都合？」

長曾我部はミーナの怪訝そうな声を受けると、力強く言葉を続ける。

「小型ネウロイには手こずりましたが、スーパ－X2の実力は中・大型ネウロイとの戦闘の方で大きく発揮されます。今からスーパ－X2の「とっておき」をお見せします。」

「……了解しました、貴方がそう言うのですから、かなりの勝算があると信じます。スーパ－X2の「とっておき」楽しみにしていますよ。」

「了」

ミーナとの交信を終えた長曾我部は、ネウロイを鋭い眼光で見据えながら力強い口調で号令を発した。

「総員、ファイヤーミラー戦用意！薫、フォックス1、ファイヤーミラー、セットオン！」

「了、フォックス1、スタンバイ、ファイヤーミラー、セットオン！」

長曽我部の言葉を受けた薫は、鋭い口調で復唱しながらコンソールを操作した。

戦闘（後書き）

スーパーX2武装変更点

搭載機関砲がJM61A1バルカン（20ミリ）からGAU-8アベンジャー（30ミリ）に変更されています。オリジナルのGAU-8用弾薬にAPDSはありませんが対G用として試作された物（タングステン弾芯）が使用されています。

また現在のGAU-8の発射速度は毎分3800発ですが、本作に登場するGAU-8は初期型から低速発射モードが排除されたタイプの為、発射速度は毎分4200発になっています。

ファイヤーミラー（前書き）

PV20000アクセス突破（（（^^；）

そしてユニーク4000アクセス突破（（（^^；）

本当にありがとうございます。そして今後も宜しくお願いします m

（
） m

ファイヤーミラー

薫の操作から若干のタイムラグを経て、スーパーX2の機体前部が大きく左右に開き、白銀に輝く鏡の様な物が姿を現した。

「…なんだ、アレ」

「…綺麗」

地中海の陽射しを浴びて輝く、鏡の様な物を見たエイラが訝しげに呟き、その傍らにいたサーニヤが、幻想的とも言える輝きを見て小さな呟きをもらす。

「…あれが、スーパーX2の「とおき」…」

ミーナが呟く中、鏡の様な物を展開させたスーパーX2は、ネウロイに向けて接近を続け、機内では薫が報告を行っていた。

「フォックス1、ファイヤーミラー、セット、全システム、オールクリア…」

薫の報告を受けた長曽我部は、スクリーンに映るネウロイから視線を外さずに傍らの羽島に向けて命令を下す。

「羽島、ネウロイの前へ」

「了」

長曽我部の言葉を受けた羽島は、短く応じながらスーパーX2をネウロイの正面へと移動させつつ、徐々に速度を低下させて行く。

「…何をする気だ…」

「まるで、攻撃を誘ってるみたいだ…」

バルクホルンとハルトマンが、呟きながらネウロイに近づくスーパーX2を見詰めていると、ネウロイの巨躯の各所から、真紅に輝く光条が次々に解き放たれ、虚空の一点へと集束されて行くのが確認された。

「フルパワーのビームを叩き込む気だな…」

「大丈夫かな…」

シャーリーが呟く傍らで、ルッキニーが心配そうな表情をスーパー

X2へと向けると、それを合図とした様に集束されたビームが発射され、毒々しい真紅の光線がスーパ―X2に吸い込まれて行く。

「まともに喰らうぞ…」

その様子を見たエイラが呟く中、真紅の光条がスーパ―X2に叩き付けられ、スーパ―X2が真紅の光に呑み込まれると思ったサーニヤとルッキーニが思わず瞳を閉じるが、スーパ―X2は光に呑み込まれる事無く、白銀に輝く鏡の様な部分、ファイヤーミラーの人工ダイヤモンドが、膨大な光を受け止めてしまう。

「薫、フォックス1、ファイヤーミラー、発射！」

「了、フォックス1、ファイヤー!!」

長曽我部の命令を受けた薫が復唱と共に、リフレクションボタンを押し込むと、刹那の間を置き、ネウロイのビームを受け止めていたファイヤーミラーから、ビームを放っていた大型ネウロイに向けてレモン・イエローの光線が奔流となって解き放たれる。

光線は地中海の蒼空を切り裂くように進むと、大型ネウロイに叩き付けられ、奔流となったエネルギーが幾何学模様の外皮に覆われた巨軀をコアごと穿ち抜き、爆砕されたネウロイの破片が、眩い陽射しを浴びて幻想的とさえ言える程の煌めきを放つ。

「っな、何だアレは!？」

「跳ね…返した…」

眼前で起きた光景に対して、バルクホルンが驚愕の声を上げ、ハルトマンも驚きの表情を浮かべつつ、呟きをもらす。

「おいおい、マジかよあの機体…」

「すごーい!、あんなの初めて見た!」

シャーリーが呆然と呟く傍らで、ルッキーニが興奮した様子で声をあげる。

「…何なんだ…アレ…」

「…凄い」

エイラとサーニヤは、驚嘆と困惑が入り雑じった表情で呟きながらスーパ―X2を見詰めていた。

「あれが：スーパーX2の「とっておき」：」

様々な表情と反応を見せるストライク・ウィッチーズの隊員達の傍らで、ミーナも驚愕の表情を浮かべながら呟きつつスーパーX2を見詰めていた。

（長曽我部一尉の言う通りね、確かに中・大型ネウロイに対する戦闘能力はずば抜けているわ：強靱な装甲に今の装備：あの機体、恐らく極めて戦闘能力の高い何かとの戦闘に特化した機体：）

ミーナは内心で呟きつつ、スーパーX2とネウロイを見詰めていたが、ネウロイの側に新たな動きが生じたのを捉えた瞬間、茜色の瞳に鋭い光を宿しながら口を開いた。

「トゥルーデ、ハルトマン、ついて来て！」

ミーナは叩き付けるように言いながら、DB-605D魔導エンジンの出力を上昇させると、スーパーX2を目指して前進を始め、それを見たバルクホルンとハルトマンは、慌ててJuma-213魔導エンジンとDB605D魔導エンジンの出力を上昇させつつ、ミーナの後を追った。

「小型ネウロイ5機、本機に接近、大型ネウロイと協同攻撃をしかけて来る模様！！」

一方スーパーX2の機内では棚倉からの報告を受けた長曽我部が、若干顔をしかめさせながら小さく頷き、羽島が苦笑を浮かべつつ、呟きをもらしていた。

「ファイヤーミラーの使用中は、別の目標への対処が難しいですからね：スーパーX2の泣き所をよくご存知だ：」

「コイツは1対1の戦闘に特化した機体だからな、複数目標の他方向からの攻撃への対処能力には限界がある：TA-32があるから当面の心配が無いとは言え、攻撃を受け続けるのは気分が良いもんじゃないな：」

長曽我部の言葉を受けた羽島が同意するように頷いた瞬間、棚倉が歓声をあげる。

「長曽我部一尉、ストライク・ウィッチーズです！」

棚倉の言葉を受けた長曾我部がモニターへと視線を向けると、スーパーX2に対する攻撃態勢に入った5機の小型ネウロイに向けて、ミーナが直上から奇襲をしかける様が確認された。

ミーナは急降下しながらMG-42を構えて7・92ミリ弾の射撃を小型ネウロイに浴びせかけ、瞬間に1機を撃墜すると、慌てて散開した小型ネウロイの中の1機にMG-42の銃先^{つっや}を向け、正確な射撃でそのネウロイを撃墜しつつ、スーパーX2とネウロイの間に自分の身体を入れて、スーパーX2をカバーする態勢に入る。

一方ミーナから奇襲を受けたネウロイは、態勢を立て直しつつ、攻撃を再開しようとしたが、それに対して遅れて到着したバルクホルンとハルトマンが攻撃を開始した。

ハルトマンのMG-42から放たれた7・92ミリ弾が、紫電となつて降り注ぐと1機のネウロイを強かに撃ち据え、爆砕する。

残る2機のネウロイは左右に散開して態勢の立て直しを計ったが、ハルトマンの直後を追従していたバルクホルンの行動がその意図を無意味な物にしてしまう。

バルクホルンが、擦れ違い様に、両手に構えたMG-151/20を左右に散開しようとするネウロイに向けてトリガーを操作すると、マズルフラッシュの閃きと共に、銃口からM-g e s h o s s が迸り出ると、2機のネウロイを相次いで粉碎し、飛散した破片が陽射しを浴びて鮮やかな煌めきを放ちながら空中を舞う。

バルクホルンとハルトマンはそのまま、ミーナと合流すると、ミーナと共にスーパーX2を援護する態勢を取りつつ周囲の警戒にあたる。

「ヤバ過ぎですね…惚れちまいますよ…」

空中を舞うダイヤモン・ドダストの中、スーパーX2を護る為に展開するミーナ達を見た羽島が微笑を浮かべながら呟くと、長曾我部は同意する様に頷きながらミーナに通信を送る。

「助かりました。後で一杯奢らせて下さい。」

「だったら、美味しい紅茶を希望してもいいかしら？」

穏やかな口調で答えるミーナに対して、長曽我部は涼しげな口調で言葉を返した。

「とびつきりを御馳走しますよ、お茶うけもおつけして…」

「お菓子！」

「そんな事への反応だけは早いんだな…」

長曽我部とミーナの会話を耳にしたハルトマンが弾んだ声をあげると、傍らのバルクホルンは溜め息を吐きながらぼやいたが、次の瞬間には、琥珀色の瞳に鋭い光を宿しながら残る2機の大形ネウロイに視線を向け、長曽我部に声をかけてきた。

「やれるか？」

「やってみましょう…」

バルクホルンは長曽我部の返答を受けると、軽い微笑を浮かべながら頷きつつ、言葉を返した。

「期待している。周囲の警戒は任せろ、お前達はネウロイとの戦闘に集中してくれ！」

「了」

長曽我部がバルクホルンとの交信を終えると、シャーリー達もスーパーX2の周囲に到着して周囲の警戒に加わる。

それを確認したミーナは小さく頷くと、スーパーX2に向けて声をかける。

「お願いします…」

「了」

長曽我部はミーナの言葉に短く応じると、羽島に指示を送り、スーパーX2を残るネウロイの前面に進出させる。

これに対してネウロイからは、無数のビームが発射され真紅の光条がスーパーX2へと襲いかかるが、スーパーX2のファイヤーミラーはそのビームを悉く跳ね返し、跳ね返されたビームが逆にネウロイへと襲いかかる。

ファイヤーミラーから放たれた光線を浴びた大形ネウロイ2機は相次いでコアを破壊され、爆砕された残骸が陽射しを浴びながら海面

へと降り注ぐ。

「やったあゝ！」

その様子を見たルッキーニが、弾んだ声を上げながらスーパーX2の周囲を祝福する様に飛び回り、それを確認した長曾我部は表情を幾分か和らげながら、口を開いた。

「どうやら、終わったようだな！」

長曾我部の言葉を受けた機内に安堵の空気が流れる中、ウィッチ達からの通信が舞い込んで来る。

第2波襲来（前書き）

指揮官紹介

ちようそかべもとひさ
長曾我部基久

イメージC V置鮎龍太郎

所属階級

陸上自衛隊一等陸尉

年齢

30

身長

184センチ

部隊変遷

第50普通科連隊

第1空挺団

特殊作戦群

特殊戦略作戦室

本作のメインキャラであり、柔らかな物腰と涼しげな雰囲気の特徴的な快男児、極めて柔軟な思考と現状認識能力を持った指揮官であり合同演習を行ったグリーンベレーの隊員達から、畏敬の念を籠めて「サムライ・ソード」の異名で呼ばれていた程の人物であり、その能力に注目した黒木特佐と権藤一佐により、部下であった羽島達と共に特殊作戦群から引き抜かれてスーパードX2試作型の機長兼対

G 戦闘前線指揮官に任命される。

先のゴジラ襲撃（ゴジラ84）の際は、第1空挺団の小隊長として都内の治安維持任務に当たっていたが、ゴジラ襲撃の後に回収されたゴジラ細胞（大河内財閥に保管されていた物）を運搬中、奪取する為に攻撃を仕掛けて来た武装勢力（バイオメジャーの私兵）と交戦し、巧みな指揮能力を発揮してそれを全滅させる。（その際の冷静沈着な指揮能力も高く評価されている。）

最大の特徴は柔軟な思考能力であり、突発的事態に対する対処能力が極めて高く、時空跳躍の際のファーストコンタクトが成功した要因となっている。

時空跳躍後は、スーパーX2や対G兵器を率いて「ストライク・ウィッチーズ」と共に対ネウロイ戦闘を行っていく事になる。

好物は甘味であり、食べるのも作るのも好きである。（腕前は一流パティシエ並）

本作には関係無いが土佐の戦国大名の長曾我部家の末裔（第45代当主）である。

第2波襲来

「凄いじゃないか！長曽我部！ネウロイのビームを跳ね返すなんて！」

「やっるじゃーん、長曽我部」

「跳ね返せるかどうかは出たところ勝負でしたが、どうやら効果があったようで正直ホッとしています。」

興奮気味のシャーリーとルツキーニの言葉を受けた長曽我部が、軽い笑みを浮かべながら応じていると、サーニヤとエイラが恐る恐る、と言った様子で接近してくると、スーパーX2をマジマジと見詰めながら口を開いた。

「あれだけビームを喰らったのに、全然ダメージを受けてないみたいだ…」

「本当…凄い」

「コイツは防御に特化した機体ですからね、防御に関してはかなり自信がありましたね。」

エイラとサーニヤの言葉に対して長曽我部が応じていると、バルクホルンとハルトマンがスーパーX2を見詰めながら呟きをもらす。

「全く、大した「とっておき」だな…」

「ビーム跳ね返して、それで攻撃するなんて中々考えつかないよね」

「それについては自分も同意見ですね。」

ハルトマンの言葉に長曽我部が同意していると、ミーナがスーパーX2のブリッジの至近距離まで近づいて来ると、改まった口調で声をかけてきた。

「長曽我部一尉、お疲れ様でした。来援、感謝します。」

「恐縮です。」

長曽我部がミーナの労いの言葉に応じた瞬間、サーニヤの猫耳から生えるリヒテンシュタン式魔導針が一際強い輝きを放ち、それと同

時にスーパーX2のレーダースクリーン上に無数の輝点が出現した。

「長曾我部一尉！識別不明機多数出現！高速で「極光」周辺海域を
アンノウン
目指し前進中！」

棚倉が急報を告げ、それと同時に、サーニャがエメラルド・グリーン
の瞳に鋭い光を浮かべながら口を開いた。

「新たなネウロイの集団です、位置は「極光」を挟んで反対側の空
域で、「極光」を目指して高速で接近中です。」

急報を受けたミーナは、茜色の瞳に鋭い光を宿しながら、口を開く。
「直ちに「極光」上空に移動！直俺隊と合流してネウロイを迎撃す
るわ！」

「了解！」

ミーナは皆の応答に対して小さく頷く事で応じると、傍らのスーパ
ーX2へと視線を転じつつ言葉を続けた。

「行きましょう…」

「了」

ミーナの言葉を受けた長曾我部は短く応じると、傍らの羽島に命令
を下す。

「羽島、「ストライク・ウィッチーズ」と共に「極光」上空に向か
うぞ。」

「了」

羽島は短く応じながらスーパーX2の機首を「極光」の方角へと向
け、それを確認したミーナは前進を命令し、それを受けたウィッチ
達はスーパーX2と共に、前進を開始した。

「極光」上空

新たなネウロイの集団が接近している事を確認した直俺隊が、美緒
の指揮によって迎撃態勢を整えていると、ミーナ率いる「ストライ
ク・ウィッチーズ」本隊とスーパーX2が到着すると、「極光」の
上空に展開を開始し始めた。

「無事だったんですね、スーパーX2、よかった〜」

健在な様子のスーパーX2を見た芳佳が安堵の溜め息をもらし、傍

らにいたリーネも同意する様に大きく頷いた。

一方直俺隊を指揮する美緒は、眼帯を外し、クリスタル・パープルに輝く魔眼で接近してくるネウロイを凝視していたが、ミーナが近付いて来たのを確認すると、ネウロイから視線を外さずに口を開いた。

「ネウロイは高速で接近中だ、後15分程で到着する。」

ミーナはその言葉を受けると、小さく頷きながら言葉が続けた。

「この空域にてスーパードX2と共にネウロイを迎撃するわ、小型ネウロイは私達が中心となって迎撃を行い、中・大型ネウロイについてはスーパードX2を主体として迎撃を実施するわ。」

「ほう…」

ミーナの指示を受けた美緒は、感嘆の溜め息をもらしつつスーパードX2へと視線を送った。

「相当な実力を発揮したようだな…」

「ええ…」

美緒の言葉を受けたミーナが、小さな笑みを浮かべつつ頷いた頃、スーパードX2の機内では、長曽我部が「極光」に向けて通信を送っていた。

「ブリッジ、こちらスーパードX2、MBF-Xの状況を報告せよ、送レ」

「スーパードX2、こちらブリッジ、MBF-X発進準備完了しました。送レ」

「スーパードX2、了、直ちに発進させてくれ。終ワリ」

長曽我部は、ブリッジの夕風との交信を終えると、ミーナに向けて通信を送る。

「ミーナ中佐、「極光」より増援を発進させます。」

「増援？」

長曽我部の言葉を受けたミーナは訝しげな表情と共に言葉を返すと、視線を戦闘海域から離脱すべく航行を続けている「極光」へと転じた。

一方、「極光」のブリッジでは夕風が船内通信のレシーバーを使用して新たな命令を下していた。

「ブリッジより第3ドック、ブリッジより第3ドック、ゲート開放、M B F—X、緊急^{スクランブル}発進、繰り返す、ゲート開放、M B F—X、緊急^{スクランブル}発進」

夕風の命令と共に「極光」の第3ドックの可動式ゲートが重々しい駆動音と共に左右に開かれ、眩い陽射しがドック内部を明るく照らし出した。

M B F | X (前書き)

ユニークアクセス5000突破並びにPVアクセス28000突破
(((^ ^ ;)

これからも応援宜しくお願いしますm (m

MBF-X

「極光」第3ドック

降り注ぐ陽射しの中、ドックの中央では、見馴れぬ形状の機体が2機、出撃前の最終チェックを受けていた。

陸上自衛隊の主力戦闘ヘリコプター、AH-1S「コブラ」を彷彿とさせるフォルムの機体と、翼の両側に装備された筒状の装備が特徴的な機体のコクピットでは、飛行服に身を包んだパイロットとガナーがタンデム配置の座席に座り、機体の最終チェックを手早く実施していた。

「最終チェック、終了つと、ユツキー、兵装システムの方はどう？」
機体側面に紫のコブラが描かれた機体の操縦席に座ったパイロットの天龍寺陽華^{てんりゅうじはるか}一等陸尉が、明るい口調で言葉を発すると、前方のガナー席に座る光彩雪菜^{こうさいゆきな}三等陸尉が、静かな口調で応じる。

「全システム、オールグリーン：問題ありません」

陽華は雪菜の言葉を受けると、小さく肩を竦めながら口を開く。

「ホントにユツキーってば、真面目ちゃんね：普段もデレツてして欲しいんだけど」

「お断りします。」

「チェッ：」

雪菜の即答を受けた陽華は不満そうに小さく呟いたが、次の瞬間には、瞳に鋭い光を宿しながら口を開いた。

「五年ぶりの実戦ね：」

「今度の敵はGとはかなり異なるタイプの敵です。注意して下さい。」

陽華は雪菜の言葉に対して、凄味のある微笑を浮かべながら頷くと、静かに言葉を続ける。

「OK、それじゃ行くよ」

陽華はそう言うと、無線機を操作して、ブリッジの夕風に向けて言葉を発する。

「ブリッジこちらパープル・ヴァイパー、発進準備完了、只今より発進する。送レ」

「パープル・ヴァイパーこちらブリッジ、了解しました。直ちに発進して下さい。送レ」

「パープル・ヴァイパー、了、終ワリ」

ブリッジとの交信を終えた陽華は、自分達の乗る機体の傍らに駐機している純白にカラーリングされた機体に向けて通信を送る。

「ヴァイス・ウーファーこちらパープル・ヴァイパー、聞いた通りよ。実戦は五年ぶりだから落っこちないようにね。後、今回の敵はGに比べると速度と機動性が段違いだから注意しなさい。送レ」

陽華の言葉に対して、純白にカラーリングされた機体から、パイロットの五月雨^{さみだれなぎさ}風沙二等陸尉が返答を送る。

「パープル・ヴァイパーこちらヴァイス・ウーファー、了解しました。そちらも充分注意して下さい。送レ」

「パープル・ヴァイパー了、それじゃ行くわよ。終ワリ」

陽華は、風沙との交信を終えると、前方のガナー席に視線を送りながら口を開いた。

「それじゃ行くよ、ユツキー」

「何時でもどうぞ」

雪菜の返答を受けた陽華は小さく頷くと、周囲を見渡して安全確認を行うと、エンジン出力を上昇させる。

陽華の操作を受け、搭載されたエンジンが轟然たる唸り声を上げる中、陽華の口から鋭い号令が発せられる。

「パープル・ヴァイパー、発進！！」

陽華の号令と共に、エンジン出力が更に上昇し、発生した揚力を受けた機体がフワリッと浮き上がると、開放されたゲートから地中海の蒼空へと上昇して行く。

一方の風沙は、グラスコクピットのモニター画面でそれを確認する

と、小さく頷きながら前方のガナー席に座る巢鴨深雪^{すかもみゆき}二等陸尉に声をかける。

「深雪、そろそろ行くわよ…」

「了解です。」

ガナー席に座る深雪が力強く言葉を返す。

その言葉を耳にした凧沙は発進態勢を整えながら、小さな呟きをもらす。

「五年ぶりね…」

「あの時とは、大分状況が違いますけどね…」

感慨深げに言葉を交わした二人の間に沈黙が訪れ、出力を上昇させて行くエンジンの音が機内に小さく響く。

「…行くわよ」

「貴女となら、地獄の果てまでも…」

深雪の返答を耳にした凧沙はエンジンの出力を更に上昇させながら、口を開く。

「ヴァイス・ウーファー、発進！」

刹那、ドック内にエンジンの轟音が響き渡り、純白の機体が滑らかに浮かび上がると、陽華達が待つ蒼空へと上昇を続ける。

「ヴァイス・ウーファー発進しました。こちらに上昇して来ます。」

「OK」

雪菜の言葉を受けた陽華は、短く応じながらグラスコクピットのモニターで周囲を確認して、空中に展開するスーパーストライク・ウィッチーズの位置を確認する。

「スーパーストライク2及び、「ストライク・ウィッチーズ」を確認。ヴァイス・ウーファーと合流してあちらに前進するよ。」

「了」

雪菜が短く応じて間も無く、待ち受ける陽華達の元に純白の機体が接近して来るのが確認された。

「ヴァイス・ウーファーこちらパープル・ヴァイパー、これよりスーパーストライク2及び「ストライク・ウィッチーズ」の位置へ前進する。我

に追従されたし、終ワリ」

陽華は交信を終了すると、エンジン出力を調整しながら機体を滑らかに前進させ、それを確認した凧沙も同じ様に機体を前進させる。澄み切ったスカイ・ブルーの蒼空の下、「極光」から発進した2機のMBF-X、試製メーサー攻撃ヘリは、スーパードX2や「ストライク・ウィッチーズ」の皆と合流する為に前進を開始した。

魔女達との共闘（前書き）

P
V
アクセス30000突破、ありがとうございます（（（^^；（
これからも宜しくお願い致しますm（m

魔女達との共闘

「極光」 上空

「極光」を発進したMBF-Xが、「ストライク・ウィッチーズ」との合流を果たすと、ウィッチ達は物珍しげな表情を浮かべながら見馴れぬ形状の機体を見詰めた。

「この機体も垂直上昇や空中静止が出来るのか：スーパーX2に加えて、この機体、お前達の世界のジェットは本当に完成度が高いな：」

MBF-Xを眺めたバルクホルンが感慨深げな眩きをもらしている
と、その脇をすり抜けたルツキーニがMBF-Xのパール・ヴァイパーコクピットに近付き、装甲に覆われたコクピットを眺めながら不思議そうに呟く。

「ねえ、コクピットが装甲で覆われてるけど：どうやって外見てるの？」

小首を傾げながら呟くルツキーニに対して、スーパーX2から長曽我部が声をかける。

「コイツの機体装甲には、スーパーX2と同じ耐熱合金TA-32が使用されていてコクピットの風防部分もそれで覆われています。パイロットは風防部分に設けられたモニターを利用して周囲の状況を確認しています。」

「へえー、スーパーX2と同じ装甲を使ってるのか：」

長曽我部の説明を耳にしたシャーリーは、瞳を輝かせながらMBF-Xを見詰めていたが、両翼に取り付けられた筒状の装備に目を止めると、首を傾げながら口を開いた。

「何だコレ？」

「それがこの機体最大の武器です。」

長曽我部がシャーリーの言葉に応じていると、美緒が魔眼を細めながら眩きをもらす。

「ネウロイが更に接近している！間も無く交戦状態に突入するぞ！」
美緒の言葉を耳にしたミーナが、表情を鋭くさせながら頷いていると、長曽我部からの通信が耳に装着されたインカムに到達した。

「合流して来た機体は、試製メーサー攻撃機、MBF-Xです、機体コンセプトとしては地上攻撃機に近い機体ですが、かなりの距離での交戦が可能ですので、火力支援任務には適任だと思われ出撃させました。」

ミーナは、長曽我部の言葉に頷くと、MBF-Xへと視線を向けながら言葉を返した。

「スーパースーパーX2と同じ素材の装甲だなんて、凄まじいわね。」

「使用しているのは機体前面だけです。機体後方及び側面が防御上のウィーク・ポイントになります。」

「…了解」

長曽我部の説明を受けたミーナは、視線をウィッチ達へと向けながら口を開く。

「リーネさんとペリーヌさんは、MBF-Xと共に遠距離からの先制攻撃と火力支援を実施して頂戴、リーネさんは紫のコブラがマーキングされた機体とペリーヌさんは純白にカラーリングされた機体とロットを組み、MBF-Xの側面及び後方をカバーして頂戴。」

「…了解」

二人がミーナの言葉に応じると、長曽我部からの通信が入る。

「コブラが描かれた機体はパープル・ヴァイパー、純白の機体はヴァイス・ウーファーとコールして下さい。」

リーネとペリーヌが、長曽我部の言葉に頷きつつMBF-Xの所に向かうのを確認したミーナは、芳佳に向けて口を開く。

「宮藤さんは「極光」の直俺を実施して頂戴。」

「はい、任せて下さい。」

芳佳の言葉を受けたミーナは頷きつつ、サーニャとエイラに声をかける。

「サーニャさんとエイラさんは、私と共にスーパースーパーX2の直接支援

を実施、残るウィッチ隊は坂本少佐の指揮下で小型ネウロイを攻撃、中・大型ネウロイに対してはスーパ―X2が攻撃を実施するわ。美緒、頼むわよ。」

「任せておけ。」

美緒が、ミーナの言葉を受けると、頷きながら言葉を返し、ミーナは美緒の言葉に頷きを返しつつ、スーパ―X2に通信を送る。

「宜しく願います。長曽我部一尉。」

「了解しました。芳佳さんの「極光」への直俺命令、感謝します。」

「…当然の事ですよ。」

「了」

長曽我部はミーナの言葉に短く応じると、MBF-Xへと通信を送る。

「パープル・ヴァイパーこちらスーパ―X2、聞いた通りだ、「ストライク・ウィッチーズ」と共にネウロイの迎撃を実施する。MBF-X隊は中・遠距離からの火力支援を実施せよ、送レ」

「スーパ―X2こちらパープル・ヴァイパー、了解、あんな美少女達との共同作戦なら大歓迎よ、送レ」

「スーパ―X2、了、事後の行動を実施せよ、終ワリ」

長曽我部が交信を終了したのを確認したミーナは、茜色の瞳に鋭い光を宿しながら、ネウロイの接近してくる方角に視線を向けると右手を大きく振り挙げた。

数拍の間を置き、接近してくるネウロイの姿が、胡麻粒のような大きさの点となって確認されると、ミーナは右手を振り降ろしながら鋭い口調で命令を下す。

「攻撃開始！」

刹那の間を置き、リーネとペリーヌと編隊を組んだMBF-Xが前進を開始し、美緒が指揮するウィッチ隊がその周囲のカバーに入りつつ前進を開始する。

「長曽我部一尉、前進して下さい。」

「了、羽島、前進開始。」

「前進します。」

羽島は、ミーナの言葉を受けた長曽我部の命令を受けると、静かにスーパーX2を前進させながら口を開いた。

「第2ラウンドですか？」

長曽我部は、羽島の言葉に対して小さく頷くと、スーパーX2と共に前進を開始したミーナ達に視線を向けながら口を開いた。

「魔女達と共闘だ。」

「…了」

羽島の返答を受けた長曽我部は、視線を前方に向けると、接近してくるネウロイに鋭い視線を向けた。

蒼き雷（前書き）

後書きにて本作に登場したMBFXの設定を記載しております。

蒼き雷

MBF-X隊

先発したMBF-X隊は、攻撃開始空域に到達すると、ホバリング態勢をとりつつペリーヌ達と共に、接近するネウロイを待ち構えていた。

「攻撃準備完了」

「OK」

雪菜の報告を受けた陽華は、小さく頷きながら応じつつ、自機の傍らで射撃を整えているリーネに向けて通信を送った。

「リーネちゃんこちらはパープル・ヴァイパー、パイロットの天龍寺陽華一尉よ、宜しくね。」

ボーイズMk. 1を構えていたリーネは、陽華からの通信に対して、柔らかな微笑を浮かべると、頭を下げながら言葉を返した。

「こちらこそ、宜しくお願いします。天龍寺一尉。」

「陽華で良いわよ。階級付けで呼ばれちゃうと、肩こっちゃうからさ、それにさ、リーネちゃんみたいな美少女には名前で呼んで欲しいなあ」

「びびび、美少女なんて…か、からかわないで下さい。」

陽華の返答を受けたリーネが、頬を赤らめながら応じているのを眺めていたペリーヌは、呆れた様子で口を開く。

「全く、本当に不思議な部隊ですわね、この部隊は…異世界に飛ばされて来たと言うのに、この落ち着き様…豪胆と云えばいいのか、凶太いと言えいいのか…」

「指揮官のお蔭ですよ。」

ペリーヌの呟きに答えるように、ホバリング態勢を維持しているヴァイス・ウーファーから風沙が通信を送って来た。

「ヴァイス・ウーファー、パイロットの五月雨風沙二等陸尉です、宜

しく願いますペリーヌ中尉」

ペリーヌは風沙の言葉を対して、小さく頷きながら言葉を返す。

「宜しくお願い致しますわ、ところで五月雨二尉、先程、指揮官のお蔭と仰ってましたわね、貴女方の指揮官、長曽我部一尉はそれほど優秀ですよ？」

「長曽我部一尉は、我々陸上自衛隊最良の指揮官の一人ですよ。でなければ我々の指揮官は勤まりませんし、こうして貴女達と轡を並べる事も出来ませんから…」

ペリーヌは、風沙の言葉に対して小さく頷きながら呟いた。

「まあ、坂本少佐が高く評価なさっているのだから優秀なのでしょうけど…」

呟いていたペリーヌだったが、ネウロイが接近して来たのを確認すると金色の瞳に鋭い光を浮かべながら口を開いた。

「ネウロイが更に接近して来ましたわ、五月雨二尉、MBF-Xの実力、拝見させて頂きますわよ。」

「了」

ペリーヌと風沙が交信している傍らでは、リーネが改めてボーイズ Mk. 1を構えなおし、それを確認した陽華は、明るい口調で言葉を発した。

「OK、OK、大分緊張が取れてるよ…」

陽華の言葉を耳にしたリーネは、ハツとした表情を浮かべると、パール・ヴァイパーに視線を向けながら口を開いた。

「てん：陽華さん、もしかして…」

「：ちよーと、肩に変な力が入ってからねー、あつ、でもリーネちゃんが美少女だったのは嘘じゃないし、陽華さんって呼んで欲しいのも本心だからね…」

「：ありがとうございます、陽華さん」

陽華の言葉を受けたリーネは、微笑と共に言葉を返し、陽華は笑いながら言葉を続けた。

「さてと、リーネちゃん、派手にかましてやりましょう。」

「はい」

リーネはそう答えると、魔力によって視力が大幅に上昇した蒼い瞳をネウロイに向けながらボーイズMk. 1を構えると、銃先を接近してくる小型ネウロイへと向けた。

「ユツキー、攻撃開始は距離800よ」

「了」

陽華がリーネの様子を確認しながら口を開くと、雪菜は短く応えながらスイッチ類を操作して攻撃態勢を整える。

「パープル・ヴァイパーこちらヴァイス・ウーファー、攻撃準備完了しました、送レ」

「ヴァイス・ウーファーこちらパープル・ヴァイパー、攻撃開始は距離800にて実施する、送レ」

「ヴァイス・ウーファー、了、終ワリ」

「陽華さん、私は何時攻撃をすれば……」

ヴァイス・ウーファーとの交信を終えた陽華はリーネの言葉に対して、即座に言葉を返す。

「リーネちゃん、距離どれくらいで攻撃出来るの？」

「えーと、約1000くらいです。」

「：OK、リーネちゃんは距離1000で攻撃開始して頂戴」

「了解です。」

リーネは返答しながらボーイズMk. 1を構えると、接近してくる小型ネウロイに銃先を向ける。

「ネウロイ接近、距離1200：大丈夫でしょうか？」

「お手並み拝見ね……」

陽華は、雪菜の呟きに短く応じると接近してくるネウロイを静かに見据えた。

ネウロイの集団は瞬く間に距離を詰めて行き、雪菜が再び口を開く。

「距離1000！」

「リーネちゃん！」

雪菜の言葉を受けた陽華が声を上げた刹那、リーネはトリガーに添

えられた指先を静かに引き絞る。

スカイ・ブルーの蒼空に轟然たる銃声が轟き、銃口から迸るマズルブラッシュの閃光と共に13・9ミリ弾が発射され、リーネのたおやかな肢体が発射の反動を受け止めて小さく震える。

解き放たれた13・9ミリ弾は、標的となった小型ネウロイめがけて一直線に突き進むと、狙い違わずにそのネウロイを穿ち、飛散した破片が陽射しの中で鮮やかな煌めきを放つ。

リーネは戦果を確認しつつ左手をコッキングレバーに伸ばすと、一気にレバーを引き次弾を薬室へと送り込み、新たなネウロイに銃先を向け、トリガーを引き絞る。

「…やるわね、スコープ無しでの遠距離射撃、さながら魔弾の射手ね。」

リーネの放った13・9ミリ弾が、2機目のネウロイを破碎するのをレーダーで確認した陽華が感嘆の呟きをもらしていると、雪菜が照準器を覗き込みながら口を開く。

「距離800！」

「OK、ユッキー、攻撃開始！」

「ファイヤー！」

陽華の号令を受けた雪菜は、復唱と共に照準器のレティクルにネウロイを捉えつつトリガーに添えられた指先を静かに引き絞る。

その瞬間、MBF-Xの両翼に搭載された装備の筒先が、蒼い光に満たされ、一瞬の間を置き先端部から、蒼空よりも鮮やかな蒼い光条が迸り出た。

光条は、蒼空を切り裂く雷となって標的となった小型ネウロイに到達すると、一撃でその体躯を穿ち抜き、破片が蒼空に飛散した。

「な、何ですの、今の攻撃は…」

「す、凄い…」

パール・ヴァイパーの攻撃を目にしたペリーヌとリーネが驚愕の声をあげていると、ヴァイス・ウーファーの両翼からも蒼き雷が解き放たれ標的となったネウロイが爆砕される。

「ビームだと!?!」

M B F―X隊の上空でその様子を確認した美緒が驚愕の声をあげ、美緒の周辺に展開したウィッチ達も驚きの表情を浮かべる。

「まったく、スーパーX2といい、M B F―Xといい、とんでも無い機体ばっかだな…」

「すっごくいい!!」

シャーリーとルッキニーが興奮気味に呟く中、M B F―X隊の放つ蒼き雷と、リーネの発射した13・9ミリ弾が更に3機の小型ネウロイを碎き、破片が蒼空に舞う。

「:あれは、ビームなの?」

M B F―X隊の後方に展開を終えたスーパーX2の上空のミーナが、半信半疑といった口調の呟きをもらすと、それに応える長曽我部からの通信がインカムへと到達する。

「M B F―Xは、ビーム兵器の一種であるメーサー光線発射装置を搭載した攻撃機として開発された機体です。」

「メーサー光線発射装置…」

ミーナが長曽我部の言葉を受け、小さく言葉を反芻した瞬間、M B F―Xとリーネが再び攻撃を行う。

ネウロイが回避行動をとった為に、撃墜こそ出来なかったものの、緊密に組まれていた小型ネウロイの編隊が左右に分断される。

「よし、今だ! 攻撃開始!」

「了解!!」

ネウロイの動きに乱れが生じた刹那、美緒の口から鮮烈な響きの攻撃開始命令が発せられ、ウィッチ達が即座に返答を返す。

それを受けた美緒は、M K―9魔導エンジンの出力を上昇させると、指揮下にあるウィッチ達と共に分断された小型ネウロイの集団に向けて急降下を開始した。

「バルクホルンとハルトマンは、私と共に右の集団(12機)を叩け! 左の集団(7機)はシャーリーとルッキニーだ!」

「了解!!」

美緒の命令を受けたシャーリーは、進路を微妙に変更して指示された編隊を捕捉すると、自分の傍らを飛行しているルツキーニ向けて口を開いた。

蒼き雷（後書き）

本作に登場したMBF-Xは、ゴジラVSモスラに登場したメーサー攻撃機の試作機と言う設定ですが、両者の設定には幾つか相違点が存在しますのでそれについて説明します。

1、VTOL機能

メーサー攻撃機はVTOL機では無くSTOL機ですが、本作に登場するMBF-Xはメーサー攻撃の増加試作機に試験的にVTOL機能が付加された機体であり、VTOL機であるスーパードX2との共同作戦の観点から「極光」に配属されています（長曽我部一尉の意見を受けた黒木特佐が根回しして配属させた）

2機体前面へのTA-32の使用とコクピット

「極光」に配属されたMBF-Xはゴジラの熱線対策として機体前面の装甲をTA-32に変更しコクピットのガラス部分にも、TA-32の装甲板を貼り付けています。視界確保としてコクピットのガラス部分全体をモニター化して外部を確認出来るようにしています。この為ガラス・コクピットより、360度全周囲モニターの方が感覚的には近いです。また、VTOL機となった事により攻撃ヘリの性格が強くなった為複座化にしております（メーサー攻撃機は単座式）。

3武装及び速度

メーサー攻撃機が搭載していたのは省電式メーサー砲でしたが、本作のMBF-Xは、火力を重視する長曽我部一尉の意見によってメーサー砲の出力が上昇させられています。TA-32の使用やメーサー砲の出力増強に伴う機体重量増加に対して、本作のMBF-Xは、メーサー攻撃機が搭載していた20ミリバルカンを取り外して

対応しております（必要となった場合は翼下のパイロンにガンポッドとして装備可能）

ただV T O L機能の付加等によって機体重量が増加した為最大速度が時速540キロに低下（メーサー攻撃機は650キロ）していますがV T O L機能を使用する事で機動性はカバーされています。

メーサー攻撃機を、S T O L機では無くV T O L機であると思違い
して書いてしまった為の捕捉設定ですので無理があると思いますが、
どうか御了承下さいm（　　）m

光輝の豹・魔風（かぜ）の獵犬（前書き）

訂正

ルッキーニさんのスライカー・ユニットG・55S「チェンタウロS」ですが、魔導エンジンがティフォーネからDB605DCMに換装されていたので訂正致します。申し訳ありませんでしたm（
」m

また、ペリーヌさんのVG・39bis2も魔導エンジンが換装されている可能性があるので訂正させて頂く可能性があるのですがどうかご了承下さい。

光輝の豹・魔風（かぜ）の獵犬

「行くぞ、ルツキーニ！！」

「アイー！」

ルツキーニは、シャーリーの呼びかけに短く応じながら手を伸ばし、シャーリーは頷きながら自分の手を伸ばしてその手を握り締める。

ルツキーニは、自分の手を包み込むシャーリーの手を感じつつコーラル・ブルーの瞳を静かに閉ざし、シャーリーは意識を集中させ始めたルツキーニと共にネウロイ目掛けて突き進む。

加速度的に接近して来るシャーリーとルツキーニに対して、7機のネウロイから迎撃のビームが放たれ、毒々しい真紅の光条が二人に向けて殺到する。

「させるかよ……」

ネウロイの攻撃を確認したシャーリーが、そう呟きながら片手を前方に掲げると、光輝く魔方陣が現出し、撃ち込まれて来たネウロイのビームが弾き返されていく。

シャーリーがネウロイのビームを弾く中、淡く朧気な光がルツキーニの小柄な肢体を包み込み、輝きを増していく。

ルツキーニの変化を感じ取ったシャーリーは、マーリン魔導エンジンの出力を増大させて速度を上昇させながら、握り締めた手に優しく力を込め、ルツキーニはそれに答える様にシャーリーの手を握り返しつつ、閉ざされていた瞳を静かに開いた。

ルツキーニのコーラル・ブルーの瞳と、シャーリーの蒼水晶の瞳が交わり、二人は刹那の間に小さな頷きを交わし合う。

シャーリーはルツキーニの肢体が光輝に包まれているのを確認すると、握り合った手を離してルツキーニの腰へと移動させ、白い上着を掴み取る。

その間にルツキーニが、両手を顔の前で交差させて意識を極限にまで集中させると、研ぎ澄まされた意識に呼応して形成された魔方陣

が、交差された両手の先に現出して鮮やかな光を放つ。

光輝に包まれるルツキーニを抱えたシャーリーは、ネウロイに視線を向けたままルツキーニの服を掴む手に力を籠めながら口を開く。

「ルツキーニ、行つてこーい!!」

シャーリーはそう言いながらルツキーニをネウロイに向けて投げ込み、自身はマーリン魔導エンジンの出力を限界にまで上昇させて急降下に入った。

光輝に包まれたルツキーニの身体は、光の弾丸となってネウロイの集団に突入し、圧倒的なまでに集中した魔力の光が複数のネウロイ（5機）を破碎し、蒼空に無数の破片が飛散する。

ルツキーニは、ネウロイの破片を突き抜けて急降下に入るが、急激な魔力消費の影響を受けたDB605DCM魔導エンジンの出力が一時的に低下し、小柄な身体がふらつきを見せた。

その瞬間、急降下してきたシャーリーの両手がふらつくルツキーニの小柄な肢体を抱き止め、優しく包み込む。

シャーリーは速度を緩めながらルツキーニに笑いかけ、ルツキーニもシャーリーに対して笑顔を向ける。

DB605DCMの出力が安定したのを確認したシャーリーが、ルツキーニから離れようとした瞬間、残る小型ネウロイ2機がそれぞれの背後に点位すると攻撃態勢へと入る。

それを確認したシャーリーとルツキーニは、抱き合った体勢から素早くBARとSAFTAの銃口をネウロイへと向け、互いの背後に迫るネウロイに銃弾を浴びせかけ撃墜する。

標的となったネウロイが破碎された事を確認したシャーリーとルツキーニは、もう一度頷き合うと、互いに身を離れた後に上昇を開始する。

その頃、美緒達も小型ネウロイへの攻撃を開始していた。

「よし、行くぞ!」

ネウロイを見据えながら美緒が言葉を発すると、ハルトマンが美緒とバルクホルンの前に進出しながら口を開く。

「…行くよ」

ハルトマンが、そう言いながらネウロイの集団に向けて手をかざして、意識を集中させると、それに誘われるようにハルトマンのかざした手の先の気流に乱れが生じ、渦巻く風となってハルトマンの身体を覆った。

魔力を宿した風に包み込まれたハルトマンは、DB605D魔導エンジンの出力を上昇させると、ネウロイに向けて加速しながら口を開いた。

「シュトゥルム！」

鮮烈な言の葉を受けたハルトマンの身体が、瞬間的に加速すると、渦巻く魔風^{かぜ}と共にネウロイの集団に突入する。

魔力を帯びた風が、無数の刃となってネウロイに襲いかかり、半数（6機）のネウロイが切り裂かれ破片が蒼空に飛散する。

ハルトマンが急降下で離脱すると同時に、美緒とバルクホルンが更なる一撃をネウロイに浴びせる。

バルクホルンのMG-151/20から放たれたMegashosが、2機のネウロイを穿ち抜き爆砕させるのを確認した美緒は、標的としたネウロイに接近しながら右手を背中にくりつけた扶桑刀「烈風丸」へと伸ばし、柄を握り締める。

ネウロイが迎撃の為に放ったビームを容易く回避した美緒は、一気にネウロイとの距離を詰めると、右手に力を入れ、抜き放った烈風丸の刃をネウロイに叩きつける。

剣刃が凄絶な閃きを放つと同時に、ネウロイが両断され刹那の間を置き破碎された。

美緒とバルクホルンがハルトマンの追従に入ると、漸く態勢を整えた3機のネウロイが美緒達の追撃態勢に入る。

それに気付いたバルクホルンが、迎撃しようとしたが美緒は小さく微笑を浮かべながら口を開く。

「不要だ、大尉」

すると、美緒の言葉を合図としたようにMBF-X隊の発射したメ

ーサー光線が2機のネウロイを爆砕し、残されたネウロイをリーネのボーイズMk・1が放った13・9ミリ弾が撃墜してしまう。

「ハルトマン、ネウロイの集団を撃滅した。ただちに上昇してミーナ達に合流するぞ。」

「了解」

美緒はハルトマンのノンビリとした応答を受けると、バルクホルンと共に上昇を始め、ハルトマンがそれに合流し更にシャーリーとルツキーニもそれに加わる。

それを確認した美緒は残る大型ネウロイに視線を向けつつ、ミーナに通信を送る。

「ミーナ、小型ネウロイを殲滅した。後は大型ネウロイだけだ。」
美緒の言葉を受けたミーナは、スーパーX2に視線を向けながら口を開いた。

「只今より大型ネウロイへの攻撃を開始します。お願いできますか？」

「問題ありません。何時でもいけます。」

ミーナは長曽我部の言葉を受けると、穏やかな表情を浮かべながら頷いたが、直ぐに表情を引き締めながら口を開いた。

「前進！」

長曽我部は、ミーナ達が前進を開始したのを確認すると前方のモニターへと視線を向けながら口を開いた。

「羽島、ストライクウィッチーズと共にネウロイに向けて前進」
「了」

長曽我部の命令を受けた羽島は、復唱と共にスーパーX2の前進を開始し、その途中で美緒達が合流してくると、無駄の無い動きでスーパーX2の周囲に展開し、周囲の警戒にあたった。

長曽我部はウィッチ達の行動を確認すると、大きく頷きながら口を開いた。

「ファイヤーミラー展開、ネウロイの前へ…」

「了、フォクシー、ファイヤーミラー、セットオン」

長曾我部の言葉を受けた薫が、復唱と共にコンソールを操作、スパーX2は白銀に輝くファイヤーミラーを展開させながら、ネウロイに向けて前進して行った。

殲滅（前書き）

1万ユニークアクセス突破並びに4万8千PVアクセス突破ありが
とうございますm（　）m

更新が送れてしまい本当に申し訳ありませんm（　）m

変更点

ペリーヌさんのVG・39bis2の魔導エンジンが判明したので
使用魔導エンジンを変更させて頂きました。

また、サーニャさんのストライカーユニットの正式名称（Mig1
―225）及び使用魔導エンジン（AM―42B）が判明したので
今後はその表記で更新を実施致します。

またBf―109K―4についても使用魔導エンジン名称がDB―
605Dでは無く、DB―605DMであった事、更にこの世界で
のMG―151／20を製造したのはマウザー社では無くマウラー
社である事が判明しましたので今後はそれに準じて表記させて頂き
ます。表記が度々変更してしまいましたがご容赦願います。

殲滅

「何だ、あれは？」

ファイヤーミラーを展開させたスーパーX2の姿を確認した美緒が、訝しげな呟きをもらすと、ミーナは、前方の大型ネウロイを見据えながら言葉を返した。

「あれがスーパーX2の「とっておき」、ファイヤーミラーよ。効果は：実物を見た方が早いわね：」

ミーナがそう言うのと、それを合図にしたようにスーパーX2がウィッチ達の前方に進出し、ネウロイに接近しながら徐々に速度を低下させていった。

「ちよつと、何をするつもりですよ！」

「そ、速度を落としたら攻撃されちゃう。」

スーパーX2から幾らか離れた空域で、MBF-X隊と共に展開していたペリーヌとリーネが驚きの声をあげる中、接近して来るスーパーX2に対して5機の大型ネウロイがビームを発射し、真紅の光条がスーパーX2へと襲いかかる。

「いかん！ まともに喰らうぞ！！」

「大丈夫よ：」

美緒の言葉を受けたミーナが短く答えると同時に、発射された幾多の光条がスーパーX2を直撃するが、ファイヤーミラーが降り注ぐ真紅の光条を受け止め、刹那の間を置きレモン・イエローの光線が迸り出た。

スーパーX2から迸り出た光線は、吸い込まれる様に1機の大型ネウロイに着弾すると瞬く間にネウロイの体躯を飲み込み、その巨体をクリスタル・レッドに輝くコアごと爆砕してしまう。

「っえっ、ええええっ！！」

「っな、何ですのアレはっ！！」

その光景を目にしたリーネとペリーヌが驚きの声をあげ、美緒も驚

愕の表情を浮かべながら口を開いた。

「跳ね返した…だと？」

「そう、ファイヤーミラーは相手の放つ光線を跳ね返し、跳ね返した光線で相手を攻撃する装備…初めて見た時は、私も驚いたわ…」
美緒の言葉にミーナが応じている間に、大型ネウロイが再びスーパーX2に向けてビームを放つが、ファイヤーミラーが再び真紅の光条を受け止めると、それをレモン・イエローの光線として撃ち返して大型ネウロイの巨軀を粉碎してしまう。

「…凄まじい威力だな…確かに中・大型ネウロイへの攻撃には、スーパーX2の方が適しているな…」

美緒が、感嘆の呟きをもらしながら前方を見詰めていると、残る3機のネウロイがビームを一点に集中させ、集束されたビームをスーパーX2目掛けて発射した。

集束され一際巨大な光条と化したビームが、奔流となってスーパーX2の機体を呑み込もうとするが、白銀に輝くファイヤーミラーが真紅の光条を受け止め、撃ち返されたレモン・イエローの光線が濁流となってネウロイの巨軀を呑み込み粉碎してしまう。

残り2機にまで撃ち減らされた大型ネウロイは、左右に別れると、スーパーX2を挟撃する態勢をとる。

「中佐、私達が左翼のネウロイを叩きますわ!!」

ネウロイの行動を確認したペリーヌからの言葉を受けたミーナは、頷きながら素早く命令を下す。

「美緒、ペリーヌさん達のサポートをお願い、エイラさんとサーニヤさんは私と共に右翼のネウロイを叩きます。トゥルーデ、貴女達は予備戦力として待機して頂戴。」

「了解!!」

ミーナの号令を受けたウィッチ達は、短く応答すると同時に素早く散開し、行動を開始した。

「羽島、我々は右翼のネウロイを叩く、ミーナ中佐に追従しろ!この戦闘でケリをつけるぞ!」

「承知！」

羽島は、長曾我部の号令に叩きつけるような口調で応じるとミーナ達の行動に合わせて、機体を右に旋回させた。

一方、MBF-Xとリーネは、スーパーX2の左翼に回り込もうとしたネウロイに向けて、メーサー光線と13・9ミリ弾の射撃を浴びせかけ、発射された光線と13・9ミリ弾が幾何学模様の外皮に覆われた体躯を深く抉り抜き、破片を飛散させる。

その間にペリーヌ達の所に到着した美緒は、ネウロイを見据えながら静かに口を開いた。

「行くぞ、ペリーヌ、一撃で決めるぞ!!」

美緒はそう言うのとペリーヌに視線を向けると、精悍な微笑を浮かべながら小さく頷き、それを受けたペリーヌは大きく頷きながら言葉を返した。

「はい、少佐、御供いたしますわ!!」

「よし、行くぞ：MBF-Xとリーネは援護射撃を頼む！」

「OK」

「任せて下さい。二人とも気をつけて下さいね」

天龍寺とリーネが言葉を返すと、美緒とペリーヌは小さく頷き合い、続けて大型ネウロイに向けて突撃を開始した。

大型ネウロイが、接近してくる美緒とペリーヌに向けて無数のビームを放つが、美緒とペリーヌは巧みな機動で降り注ぐビームを回避しながら、大型ネウロイとの距離を詰めて行く。

ネウロイが更に迎撃のビームを発射しようとする、機先を制する様にMBF-Xとリーネの放ったメーサー光線と13・9ミリ弾がネウロイの巨躯を穿ち抜き、美緒とペリーヌの行動を援護する。

ペリーヌはその様子を確認しながら右手を静かに掲げると、虚空に小さな印を結びつつ意識を集中させた。

すると、ペリーヌの意識に呼応するように小さな雷が発生し、瞬間に規模を拡大させて行くと、ペリーヌの周囲を包み込んでいった。雷をその身に纏ったペリーヌの両脚を包むVG-39bis2に搭

載されたクワドラ12Z―89魔導エンジンが出力を上昇させ、発生した推力を受けたペリーヌの肢体が美緒の前方へと進み出た。

美緒は、ペリーヌが前方に進出したのを確認すると、隻眼で大型ネウロイを見据えつつ、口を開いた。

「今だ！ペリーヌ！」

美緒の言葉がインカムから響いた刹那、ペリーヌの金色の瞳が一際強い輝きを放ち、それと同時に口から鮮烈たる言の葉が解き放たれた。

「トネール！！」

その瞬間、言の葉に呼応する様にペリーヌの周囲を包み込む雷が無数のスパークを放ちつつ前方の大型ネウロイに向けて迸り出た。

放たれた雷が大型ネウロイに吸い込まれ、強かに撃ち据えられた巨体から、爆砕された外皮が無数の破片と化して空中に吹き飛ばされ、降り注ぐ陽射しの中で鮮やかな煌めきを放った。

その様子を確認した美緒は、MK―9魔導エンジンの出力を上昇させながらペリーヌの傍らに進み出ると、精悍な表情を少しだけ柔らかくしつつ小さく頷きかけ、それを見たペリーヌは頬を少し赤らめさせながら頷きを返す。

ペリーヌの頷きを確認した美緒は、視線をネウロイへと戻しながら背中の烈風丸を抜き放つと、一気に加速してネウロイ目掛けて急降下を開始した。

ダイヤモンド・ダストの様に煌めきながら舞う破片の中を突き抜けた美緒は、構えた烈風丸の刀身が魔力を帯びて鮮烈な輝きを放つのを確認すると、輝く刀身をネウロイ目掛けて振り降ろしながら口を開いた。

「烈風斬！！」

美緒の言の葉に誘われるように振り降ろされた刀身から魔力を帯びた光が三日月形の光弾となって発射され、ネウロイの巨軀を両断しクリスタルレッドに輝くコアが破碎された。

刹那の間を置き真つ二つになったネウロイが微塵に砕け、無数の破

片が蒼空に飛散した。

美緒が無数の破片の舞う空中に静止し、烈風丸を背中の鞆に戻している。傍らに近付いて来たペリーヌが弾んだ口調で声をかけてきた。
「お見事ですわ少佐」

ペリーヌの言葉を受けた美緒は小さく頷く事で応じると、最後に残る大型ネウロイへと視線を向けた。

「後はミーナ達だな」

美緒の言葉を受けたペリーヌは、同意するように頷きながら美緒と同じ方向に視線を向けた。

その頃、ミーナ達は最後の大型ネウロイに向けて接近しつつ、MG-42とフリーガーハマーの射撃をネウロイに浴びせかけていた。撃ち込まれた7・92ミリ弾とロケット弾が着弾し無数の破片が飛散する中、ネウロイから無数のビームが発射され接近するウィッチ達に降り注ぐ。

ミーナは巧みな機動でネウロイの放つビームを回避し、ミーナの後方を進むエイラとサーニャも真紅の光条を回避して行く。

必要最小限の機動でネウロイの放つビームを回避したミーナは、ネウロイから視線を外さぬまま無線機を通じてスーパーX2に通信を送る。

「長曾我部一尉……」

「委細承知、現在貴隊を追従中、この戦闘でケリをつけましょう！」
「……了解」

長曾我部の小気味良い返信を受けたミーナが、小さな微笑を浮かべながら応じると、それを合図とした様にネウロイが無数のビームを放ち、毒々しい真紅の光条がミーナ達を呑み込もうとするが、その瞬間、ミーナの口から鋭い号令が発せられた。

「散開！」

刹那の間を置き、三人が素早く散開して撃ち込まれて来た無数の光条を回避した。

空しく虚空を切り裂いた光条の束は、ミーナ達の後方を追従してい

たスーパーX2へと降り注ぎ、白銀に煌めくファイヤーミラーが夥しい量の光条を受け止めた。

「ストライク・ウィッチーズ、ファイヤーミラーの射線上より離脱！」

スーパーX2のブリッジで棚倉からの報告を受けた長曽我部は小さく頷きつつ口を開き、命令を下す。

「ファイヤーミラー、発射！」

「了、フォクス1、ファイヤー！！」

長曽我部の命令を受けた薫が、叩きつけるような口調で復唱しながらリフレクションボタンを押し込み、ファイヤーミラーからレモンイエローに輝く光線が発射された。

迸り出た光線は、大型ネウロイ目指して突き進んでその巨軀を呑み込み、クリスタル・レッドに輝くコアをその体軀ごと爆砕した。

爆散した無数の破片が舞う中、スーパーX2は空中で停止し、ミーナ達が合流して来た。

スーパーX2が搭載レーダーで、サーニヤが猫耳から生えるリヒテンシュタイン式魔導針で周辺の状態を確認したが、新たなネウロイの存在は確認されず、戦闘に終幕が訪れたのが確認された。

「：周辺に新たなネウロイの反応無し：」

「新たな敵性及び識別不能反応、確認されません。」

サーニヤと棚倉が相次いで報告を行うと、ミーナと長曽我部は肩の力を緩めながら安堵する様に小さく頷いた。

「ネウロイの殲滅を確認、各自速やかに集合して頂戴」

「パープル・ヴァイパーこちらスーパーX2、状況終了、直ちにこちらに合流せよ、終ワリ」

ミーナと長曽我部が指示を送るとストライク・ウィッチーズとMBF-X隊が次々と集まって来た。

ミーナはウィッチ達に異常が無い事を確認すると、視線をスーパーX2へと向けながら口を開いた。

「長曽我部一尉、ネウロイの殲滅に成功しました。陸上自衛隊の協

あなたがた

力に深く感謝致します。」

「感謝するのは自分達の方です。貴女方は正体すら定かで無い自分達の為に直俺隊を残した上でネウロイの迎撃に入ってくれました。感謝します。」

ミーナの通信を受けた長曽我部は、清々しい口調で返信すると、一瞬の間を置き、再び通信を送る。

「ミーナ中佐、連戦による疲労等は大丈夫ですか？「極光」は貴女方の基地へと向かっていますので、よろしければ「極光」に降りられては如何ですか？」

長曽我部の提案を受けたミーナが、傍らのウィッチ達に視線を送ると美緒が、穏やかな表情を浮かべながら皆を代表する様に小さく頷いた。

美緒の頷きを目にしたミーナは、微笑を浮かべながら頷くと、スーパーX2へと返信を送る。

「皆、かなり魔力を消費しているし、聞きたい事もあります。お言葉に甘えてお邪魔させて頂きますね。」

「了、歓迎致します。」

交信が終了すると同時にスーパーX2とMBF-Xが機首を「極光」へと向け、ウィッチ達と共に前進を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3123o/>

異界の防人

2011年1月21日13時34分発行